

## 2012 年アート・クリティック活動の報告

### 演劇研究グループ

編集委員：安藤隆之、酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

演劇研究グループは当初、音楽研究者の粟倉宏子、演劇研究者の酒井正志、同じく安藤隆之の三名でスタートした。手がけたことはふたつ、劇場調査と観劇批評活動である。前者は東海三県を対象に公共ホールについてヒアリング調査とデータ収集を実施した。幾度も報告書を刊行したが、これを基礎に日本から海外へと対象を拡大していった。

後者は「アート・クリティック」という文芸サロンを中心に研究報告会を実施してきた。今や四半世紀という長い歴史を持つが、数年前からオペラ・ミュージカルに重点を置いた意識的な観劇報告会の色彩が強くなってきた。名古屋ではオペラ・ミュージカルの批評文化は低調である。研究者や批評家の層が薄いため仕方のないことではあるが、名古屋のためにも全国的な視野に立つ情報収集と批評が必要であると考えて、全国のオペラ・ミュージカル公演を重点的に観劇することによって無謀にも日本の「現状と展望」という視点で論集を作ることにした。以後、二年目を迎え、来年は三年目となる。果たして研究所の叢書にまとめられるかどうか不安ではあるが、集積された基本情報、短評、そして個別作品の分析などを見ると、一定の水準に達しつつあると期待を強めている。観劇調査は時間とお金がかかるものであるが、研究会のメンバーは東奔西走中である。刊行物として着地できるようにしたいと願わずにはいられない。

(安藤隆之 記)

・ 2012 年アート・クリティック活動の報告

2012 年の 1 月例会から 12 月例会で報告された観劇演目リストに、ほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。

能『翁』（名古屋能楽堂正月特別公演） 1 月 3 日(火) 14：00～ 名古屋能楽堂 (磯野)

MET ライブビューイング・オペラ『ロデリンダ』（ヘンデル作曲） 1 月 8 日(日) 10：00～ ミッドランドスクエア (服部)

オペラ『トゥーランドット』（プッチーニ 作曲・ウクライナ国立オデッサ歌劇場マリア・グレギーナ 主演） 1 月 9 日（月・祝） 17：00～ 愛知県立芸術劇場大ホール (玉崎・磯野・酒井)

演劇『ハムレット』（柄本明 演出） 1 月 4 日(水) 下北沢ザ・スズナリ劇場  
劇団東京乾電池 35 周年記念公演 原作：シェイクスピア 出演：墓堀・柄本明、亡霊・ベンガル、ハムレット・深水俊一郎、オフィーリア・山口智子 劇団東京乾電池 (伊藤)

演劇『8 人の女たち』（G2 演出・ロベール・トマ戯曲） 1 月 14 日(土) 12：00～ ウィンク愛知・大ホール (玉崎・服部)

MET ライブビューイング・オペラ『ファウスト』（グノー作曲） 1 月 18 日(水) 10：00～ ミッドランドスクエア (服部・玉崎)

aaf コンサート・音の楽園 Part 2『オペラと魔女』 1 月 21 日(土) 13：30～ 愛知県立芸術劇場コンサートホール (服部)

ミュージカル『モンティ・パイソンのスパマロット』（福田雄一 企画・脚色・演出） 2 月 2 日(日) 森の宮ピロティホール

2005 年トニー賞ミュージカル最優秀作品賞受賞作 脚本・作詞・音楽：エリック・アイドル  
音楽：ジョン・ドゥ・ブレ 主演：ユースケ・サントマリア、ムロツヨシ、池田成志、彩吹真央  
制作：TBS & サンライズプロモーション (伊藤)

宝塚・宙組『仮面のロマネスク』& ファナティック・ショウ『アッパシオナード』 2 月 4 日(土) 12：00～ 中日劇場

『仮面のロマネスク』(ラクロ作「危険な関係」より、植田景子 演出) & ファナティック・ショウ  
『アップパシオナード』(藤井大介 作・演出) 大空祐飛・野々すみ花主演 (宝塚宙組)  
制作: 宝塚歌劇団 (磯貝)

演劇『三人姉妹』(チェーホフ原作、鐘下辰男 上演台本・演出) 2月9日(日) 愛知県芸術劇場小ホール

舞台美術: 島次郎 照明: 中川隆一 音響: 井上正弘 衣装: 中矢恵子 主演: 山下傭兵、堀優子、中田祐子、長浦恵 制作: 日本劇団協議会 企画・総合演劇集団俳優館 制作者: 森 剣

(伊藤)

シネマ歌舞伎『天主物語』(坂東玉三郎 演出・主演) 2月9日(金) 10:30~12:30 MOVIX 三好

作: 泉鏡花 演出: 成井一郎、玉三郎 美術: 小川富美雄 音楽: 唯是真一 振付: 藤間勘吉郎  
(玉崎紫 2009年歌舞伎座公演「天主物語」も含め報告)

小空間オペラ『リゴレット』 2月10日(金) 12:00~ はなみがわ風の丘ホール

風の丘 HALL (千葉市) 歌手: 光岡暁恵、須藤慎吾、小山陽二郎 (芸術監督を兼ねる) 演出: 岩田達宗 制作: 小空間オペラ TRIADE & 千葉市 (服部)

ミュージカル『ラ・カージュ・オ・フォール 籠の中の道化たち』(山田和也 演出) 2月12日(日) 13:00~ 愛知県立芸術劇場大ホール

トニー賞 1984年6部門受賞・2005年2部門受賞・2010年3部門受賞作品

作詞・作曲: ジェリー・ハーマン 脚本: ハーベイ・ファイアスティン 原作: ジャン・ポワレ  
主演: 市村正親、鹿賀丈史 制作: 東宝・ホリプロ (玉崎・玉崎紫)

2月花形歌舞伎『義経千本桜、女伊達、雪暮夜入谷畦道』 2月12日(日) 昼公演 11:00~ 御園座  
制作: 松竹

『通し狂言 青砥稿花紅彩画 白浪五人男』 2月14日(火) & 23日(木) 夜公演 16:15~19:55  
主演: 松緑、菊之助、時蔵 (磯貝)

MET ライブビューイング・オペラ『The Enchanted Island』(F.マクダーモット 演出、W.クリスティ 指揮) 2月13日(月) 10:00~ ミッドランドスクエア

曲: ヘンデル、ヴィヴァルディ、ラモー他 台本: ジェレミー・サムズ 主演: ダニエル・ドゥ・ニース、デイヴィッド・ダニエルズ、ジョイス・ディドナート (服部・玉崎・磯野・塹江)

ミュージカル『シンデレラ』（永井寛孝 上演台本・訳詞・演出） 2月17日(金) 18:30～ 名古屋市青少年センター・アートピアホール

作曲：リチャード・ロジャーズ 作詞・台本：オスカー・ハマースタイン 音楽監督・指揮：中島良史 振付：高木順子 翻訳：福島孝子 美術：大田創 衣装：木場絵里香 照明：曾我裕幸  
出演：桂川結衣、政所和行、目次恭子、鈴木保奈実（魔法使い）、加藤恵利子（王妃）  
制作（公財）名古屋市文化振興事業団 （服部・玉崎・磯貝・橋詰・磯野）

オペラ『ナブッコ』（東京二期会・ダニエレ・アバド 演出） 2月18日(土) 14:00～ 東京文化会館大ホール

指揮：アンドレア・パッティストーニ 出演：青山貴、今尾滋、斉木健詞 美術・衣装：ルイージ・ペレーゴ 照明：ヴァレリオ・アルフィエリ 制作：公益財団法人東京二期会 & イタリア・パルマ王立劇場との提携公演 平成23年度文化芸術振興費補助金（芸術創造活動特別推進活動）  
(服部)

オペラ『沈黙』（松村禎三 台本・作曲、遠藤周作 原作、宮田慶子 演出、下野竜也 指揮）

2月19日(日) 14:00～ 新国立劇場中ホール

主演：小餅谷哲男、経種廉彦、高橋薫子 制作：新国立劇場 (服部)

シネマ歌舞伎『海神別荘』（玉三郎 主演・演出） 2月21日(火) 10:15～12:15 MOVIX 三好

作：泉鏡花 演出：成井一郎 & 玉三郎 美術・衣裳考証：天野喜孝（玉三郎共同） 装置：中嶋正留 作詞：田中傳次郎 編曲：浅川朋之（ハーブ：玉三郎のアイディア） 主演：玉三郎 & 海老蔵  
(玉崎紫)

オペラ『フィガロの結婚』（モーツァルト作曲 松尾葉子 指揮） 2月26日(日) 14:00～ 愛知県芸術劇場大ホール

名古屋音大オペラ公演 演出：たかべしげこ 主演：又吉秀和、基村昌代、日々野景

制作：名古屋音楽大学 (服部)

②①「歌舞伎フォーラム公演」 2月27日(月) 16:00～ ウィンクあいち・大ホール

[第1部] 河竹黙阿弥 作『白波五人男～稲瀬川勢揃いの場～』 出演：新城歌舞伎

[第2部] 「歌舞伎の見方」 出演：千川貴楽 (磯野)

②②ミュージカル『Ha, Breath of Life』 2月24日(金) 19:30～ Pacific Theatre (The Polynesian Cultural Center), Kamehameha Highway Laje, Hawaii (玉崎)

②③ジャカルタ観劇報告 (2/8 - 2/13)

宗教舞踊 & パペット (マリオネット) in 国立劇場 & 劇場調査 (in ヤンゴン) など (安藤)

②④能『隅田川』(喜多流) 狂言『禰宜山伏』和泉流 3月3日(土) 14:00~ 名古屋能楽堂

『隅田川』(ブリテン『カーリユー・リバー』) 主演: 長田 <sup>たかし</sup> 驍、須藤有哉、飯富雅介

狂言『禰宜山伏』主演: 井上靖浩 名古屋市文化振興事業団 [名古屋能楽堂] & 能楽協会名古屋支部主催 (磯野)

②⑤ミュージカル『ハムレット』(ヤネック・レデツキー 脚本・作曲・作詞 (チェコ初演)、栗山民也 演出) 3月4日(日) 中日劇場

原作: シェイクスピア 脚本: ロバート・ヨハンソン 英語歌詞: ジョージ・ハーヴィラノヴィンス・パリロ 編曲: マーティン・キュムザック 翻訳・訳詞: 小田島恒志 音楽監督: 甲斐正人 美術: 松井るみ 照明: 服部基 衣装: 前田文子 振付: 田中井智子 アクション: 渥美博 主演: 井上芳雄、昆夏美、伊礼彼方、成河、涼風真世、村井国男 上演権許諾: Ice Music. SRO. アジア上演権: Theatro 制作: 東宝 [ブラハ 1999 初演; 2005 Broadway 初演世界版 (英語)]

(服部・玉崎・玉崎紫・磯貝)

②⑥わらび座ミュージカル『アトム』(横内謙介 脚本・演出) 3月7日(水) 18:30~ 中京大学文化市民会館ブルニエホール

原案: 手塚治虫 作曲: 甲斐正人 振付: ラッキィ池田、彩木エリ 監修: 手塚真

主演: 鈴木裕樹、碓井涼子 共同制作: 新宿区 (制作わらび座) (玉崎)

②⑦映画『戦火の馬』 3月9日(金) 12:30~ ミッドランドスクエア

2008年ローレンス・オリヴィエ賞受賞・2011年トニー賞演劇部門最優秀作品賞受賞 (ナショナル・シアター)・原題 War Horse からスピルバーグ監督・ジョン・ウィリアムズ作曲 (玉崎・服部)

②⑧オペラ『タンホイザー』(R. ワーグナー作曲、沼尻竜典 指揮)

3月10日(土) & 3月11日(日) 14:00~ 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

演出: ミハエル・ハンペ 舞台装置・映像デザイン: サンディエゴ・オペラのために 衣装デザイン: ウォルター・マホーニ 照明: マリー・バレット 舞台装置制作: サンディエゴ・オペラ・シーニック・スタジオ

主演: 福井敬、小山由美、二塚直紀、佐々木典子、並河寿美

京都市交響楽団響 びわ湖ホール声楽アンサンブル・二期会合唱団 びわ湖ホール & 神奈川県民ホール・東京二期会・京都市交響楽団共同制作 平成23年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 (共同制作公演) (服部 3/11・塹江 3/10)

- ②⑨ミュージカル『New ヒロイン・女たちよ タフであれ!』(川崎悦子 演出・振付) 3月15日(木)  
18:30~(楽日) 中日劇場  
脚本・作詞:高橋知伽江 作詞・作曲・音楽監督:深沢佳子 美術:二村周作 衣装:宮本尚子  
主演:榊原郁恵、早見優、松本伊代、石野真子、川崎麻世 企画制作:アトリエ・ダンカン/I do  
better project (服部)
- ③⑩音の楽園 Part 3・オペラ『マクベス』(演奏会形式・時任康文 指揮) 3月17日(土) 14:00~ 愛  
知県芸術劇場コンサートホール  
主演:堀内康雄、田口智子、ジョン・ハオ、又吉秀樹、名フィル、AC 合唱団 ナビゲーター・コ  
レペティトゥア:服部容子 制作:愛知県文化振興事業団 (服部・玉崎・塹江)
- ③⑪演劇『GOEMON~孤高の戦士』(早乙女太一 特別公演) 3月17日(土) 11:00~ 御園座  
脚本:渡辺和徳 原案:紀里谷和 演出:岡村俊一 衣装:小篠ゆま  
主演:早乙女太一・波乃久里子・山本亨 (磯貝)
- ③⑫MET ライブビューイング・オペラ『エルナーニ』(ヴェルディ作曲 マルコ・アルミリアート 指  
揮) 3月20日(火・祝) 10:00~13:22 ミッドランドスクエア  
演出:ピエール・ルイジ・サマリターニ 主演:アンジェラ・ミード、マルチェッロ・ジョルダー  
ニ、ディミトリ・ホヴォロストフスキー、フェルッチオ・フルラネット (玉崎・服部)
- ③⑬演劇『どん底』(ベリャコーヴィッチ 演出) 3月20日(火・祝) 16:00~ 桑名市市民会館 四  
日市演劇鑑賞会  
原作:ゴーリキー 訳:佐藤史郎 演出・美術:V・ベリャコーヴィッチ 衣装:A. プーシキン  
制作:劇団東演 (服部)
- ③⑭ミュージカル『My One and Only』(G. ガーシュイン作曲 ビル・バーンズ 演出) 3月22日(木)  
13:30~ 青山劇場 & 3月30日(金) 18:30~ 大阪シアター・BRAVA!  
1983年 Broadway 初演 トニー賞・振付・主演・助演男優賞受賞作品 日本版初演 1985年に来  
日公演 (服部・玉崎紫)
- ③⑮演劇 The Duchess of Malfi (by John Webster) The Old Vic (London) 3月26日(月) (酒井)
- ③⑯マンマー劇場調査報告 (3月下旬滞在) (安藤)
- ③⑰演劇『佐山家の惜春』(栗木英章 作・しものみさえ 演出) 3月30日(金) 19:00~ 平針小劇場

- 劇団名芸創立 50 周年記念公演 主演：亀山薫、近藤亜由美、滝沢美幸 [劇団名芸] (磯野)
- ③⑧演劇『シンペリン』(蜷川幸雄 演出・彩の国シェイクスピア・シリーズ第 25 弾) 4 月 3 日(火)  
18:30 ~ 彩の国さいたま芸術劇場・大ホール (伊藤)
- ③⑨オペラ『セビリアの理髪師』(ロッシーニ作曲、現田茂夫 指揮) 4 月 7 日(土) 14:00 ~ 愛知県  
芸術劇場大ホール  
錦織健プロデュース・オペラ 演出：十川稔 主演：錦織健・森麻希・堀内康雄 (玉崎・塹江)
- ④⑩オペラ『魔笛』(演奏会形式・ピーター・ブルック 演出) 4 月 8 日(日) 15:00 ~ びわ湖ホール  
(服部)
- ④⑪ミュージカル『9 時から 5 時まで』(原作：同名映画 西川信廣 演出) 4 月 8 日(日) 12:00 ~  
中日劇場  
原作：パトリシア・レズニック 作詞・曲：ドリー・パートン 振付：上島雪夫 美術：乗峰雅  
衣装：渡辺雪三郎 音楽監督：上田亮 指揮：後藤 制作：東宝 主演：草刈民代、紫吹淳、友近  
(玉崎)
- ④⑫ミュージカル『ジキル & ハイド』(山田和也 演出) 4 月 14 日(土) 13:00 ~ 愛知県芸大ホール  
1997 年 Broadway 初演 トニー賞作品・主演・衣装・照明候補 (玉崎・玉崎紫)
- ④⑬音楽劇『お嬢さん、お手上げた!』(マキノノゾミ 作・演出 沢田研二 主演) 4 月 18 日(水) ウィ  
ンクあいち大ホール (服部・玉崎)
- ④⑭演劇『細雪』(水谷幹夫 演出) 4 月 14 日(日) & 4 月 21 日(日) 御園座  
原作：谷崎潤一郎 脚本：菊田一夫 潤色：堀越真  
主演：高橋恵子、賀来千香子、水野真紀、石川梨華 (磯貝・磯野)
- ④⑮オペラコンチェルト『ヴェルディ VS ワグナー』 4 月 22 日(日) 15:00 ~ 豊田市コンサー  
トホール (服部)
- ④⑯ミュージカル『道化の瞳』(玉野和紀 作・演出) 4 月 26 日(木) 18:30 ~ 愛知県芸大ホール  
(玉崎)
- ④⑰ミュージカル『神戸はばたきの坂』(謝珠栄 演出) 4 月 28 日(土) & 5 月 2 日(水) 兵庫県立芸術文化

センター中ホール

兵庫県立芸術文化センター・プロデュース・2012 平成 24 年度文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 (服部・玉崎)

④8 演劇『Lorca 閉ざされし楽園 ガルシア・ロルカ・コラージュ作品』(田尻陽一 翻訳・脚色、神宮寺啓 演出) 5月4日(水) 14:00~ 愛知県芸小ホール  
舞台美術:神宮寺啓 出演:榊原忠美、永野昌也 制作:劇団クセック Act 2012 (伊藤)

④9 英語劇 Hamlet (Nameless & Theatre) 5月13日(日) 愛知県芸小ホール (伊藤)

⑤0 『楽園』(スイセイ・ミュージカル) 5月5日(土) 14:00~ 名古屋芸術創造センター (玉崎紫)

⑤1 オペラ『アドリアーナ・ルクブレール』(F.チレア曲) 5月6日(日) 14:00~ 吹田メシアター(関西二期会)  
平成 24 年度文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業) (服部)

⑤2 MET ライブビューイング・オペラ『マノン』(マスネ作曲) 5月10日(木) ミッドランドスクエア (塹江)

⑤3 MET ライブビューイング・オペラ『椿姫』(ヴェルディ作曲) 5月16日(水) ミッドランドスクエア (塹江)

⑤4 音楽劇『シンデレラ・シンデレラ』(鈴木忠志 作・演出) 5月6日(日) 13:00~ 静岡芸術劇場 SPAC  
台本・歌詞:鈴木忠志 音楽:既成曲 装置・照明・振付・衣装・音響:SPAC 出演:大田夏子 他劇団 SCOT & SPAC 制作:静岡芸術劇場・富山文化振興事業団(利賀村でも上演) (玉崎)

⑤5 「砂川涼子・村上敏明デュオ・コンサート」 5月12日(土) 18:00~ 宗次ホール (服部)  
コンサート&『ラ・ボエーム』ミニチュア版

⑤6 演劇『長崎ぶらぶら節』(なかにし礼 作、鶴山仁 演出、文学座) 5月16日(水) 四日市演劇鑑賞会 四日市市文化会館 (服部)

⑤7 オペレッタ『こうもり』(ウィーン・フォルクスオパー公演) 5月13日(日) 14:30~ 東京文化会館 (塹江)



- ⑤8 演劇『エンロン』（デヴィッド・グリンドレー 演出） 5月16日(水) 18:30～ 名鉄ホール  
オリヴィエ賞最優秀演出賞、T.M.A 演劇賞最優秀作品賞受賞 イブニングスタンダード演劇賞最優秀演出賞受賞 トニー賞最優秀オリジナル楽曲・歌詞賞ノミネート  
ルーシー・ブレブル作 翻訳：常田景子 美術：堀尾幸男 音楽：荻野清子 振付：長谷川寧  
衣装：原まさみ 主演：市村正親、伊礼彼方、香寿たつき、豊原巧輔 (磯貝・玉崎紫)
- ⑤9 演劇『ローマの休日』（マキノノゾミ 作・演出） 5月16日(水) 18:30～ 長良川国際会議場  
オリジナル脚本：オアン・マクレラン・ハンター & ジョン・ダイトン 原作：ダルトン・トランボ 脚本：鈴木哲也・マキノノゾミ 音楽：渡辺俊幸 美術：奥村泰彦 衣装：宮本宣子 振付：前田清美 照明：笠原俊幸 主演：吉田栄作、荘田由紀、小倉久寛、川下大洋（声のみ）  
第36回菊田一夫演劇賞受賞作品 制作：梅田芸術劇場 (玉崎)
- ⑥0 オペラ『スペイン時間 & 子供の魔法』（ラヴェル作曲 ジェローム・カルタンバック 指揮 加藤直 演出）(二期会ニューウエーブ・オペラ) 5月19日(土) 17:00～ 新国立劇場中劇場  
平成24年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業） (服部)
- ⑥1 演劇『負傷者16人』（宮田慶子 演出） 5月19日(土) 13:00～ 新国立劇場小劇場  
エリウム・グライアム作 翻訳：常田景子 出演：井上芳雄、益岡徹、東風万智子 (服部)
- ⑥2 オペラ『ウィンザーの陽気な女房たち』（ウィーン・フォルクスオパー公演） 5月20日(日)  
15:00～ 東京文化会館 (塹江)
- ⑥3 演劇『ロミオ & ジュリエット』（ジョナサン・マンビイ 演出） 5月26日(日) 13:00～ 赤坂 Actシアター  
原作：シェイクスピア 翻訳：松岡和子 上演台本：青木豪 美術・衣装：マイク・ブリットン  
音楽：かみむら周平 振付：広崎うらん 主演：佐藤健、石原さとみ 制作：ネルケプランニング  
ゴーチ・ブラザーズ (伊藤)
- ⑥4 オペレッタ『メリー・ウィドウ』（ウィーン・フォルクスオパー公演） 5月26日(日) 15:00～  
東京文化会館 (塹江・服部)
- ⑥5 演劇『The Bee』（野田秀樹 作演出・日本語版） 6月3日(日) 14:00～ 大阪ビジネスパーク円形ホール  
NODA-MAP 番外公演 原作：筒井康孝「[拳] りあい」（新潮社）より 共同脚本：野田秀樹 & Colin Teevan 出演：宮沢りえ、池田成志、近藤良平、野田秀樹

美術：堀尾幸男 照明：小川幾雄 音響・効果：高都幸男 映像：奥秀太郎

企画・制作：NODA-MAP

(伊藤)

⑥⑥演劇『燕のいる駅』(土田英生 作・演出) 6月1日(金) 19:00～ テレピアホール

土田英生セレクション Vol. 2

出演：酒井美紀、内田滋、千葉雅子、久ヶ沢徹 制作：キューカンパニー(三鷹市芸術文化振興財団) 文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)

(玉崎)

⑥⑦ミュージカル『おもいでぼろぼろ』(わらび座) 6月2日(土) 14:30～ パティオ池鯉鮒かきつばたホール [知立市]

(橋詰)

⑥⑧ミュージカル『湖の白鳥』(劇団あおきりみかん) 6月2日(土) 14:00～ & 19:00～ 県芸小ホール

(服部・玉崎)

⑥⑨演劇『それぞれの旅路』(岩川均 台本・演出) 6月10日(日) 13:00～ 県芸小ホール

テレンス・ラティガン作・小田島雄志訳「銘々のテーブル」より

出演：西脇瑞紀、寺田夏梨、山田昌、天野鎮雄 舞台監督：金子康雄 照明：石原福雄

衣装：F.G.G. 劇座公演

(橋詰)

⑦⑩演劇・オリヴィエ・ピエの完全版『ロミオ & ジュリエット』(オリヴィエ・ピエ 演出・翻訳)

6月10日(日) 14:00～ & 6月23日(土) 16:00～ 静岡芸術劇場

原作：シェイクスピア 出演：マチュー・デセルティース、カミーユ・コピ他

パリ・オデオン座公演 フランス版スタッフに加え、日本からも舞台監督、舞台、照明、音響、衣装他のスタッフ

平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造的発信事業

(服部・伊藤)

⑦⑪演劇『ハンドダウン・キッチン』(蓬萊竜太 作・演出) 6月14日(木) 19:00～ ウィンクあいち大ホール

音楽：かみむら周平 美術：二村周作 照明：高見和義 衣装：前田文子

主演：仲村トオル、YOU、柄本佑、江守徹 制作：パルコ

(玉崎)

⑦⑫六月大歌舞伎『夏祭浪花鑑・素襖落』昼公演『石川五右衛門』夜公演(市川海老蔵)

(磯貝・磯野・橋詰・塹江)

⑦⑬『こんにちは、母さん』(永井愛 作・劇団名古屋) 6月16日(土) 18:30～ 熱田文化小劇場 夜

公演

(橋詰)

⑦④『ルチア』(シリーズトーク：水谷彰良) 6月21日(木) 19:00～ 県芸コンサートホール (塹江)

⑦⑤演劇『キリング・フィールドを越えて』(オン・ケンセン 演出) 6月23日(土) 12:30～  
舞台芸術公園・楢円堂 SPAC 静岡 (伊藤)

⑦⑥演劇『マハーバーラタ・ナラ王の冒険』(久保田梓美作・宮城聡 演出) 6月23日(土) 19:00～  
舞台芸術公園・有度 SPAC 静岡 (伊藤)

⑦⑦演劇『萩家の三姉妹』(永井愛作・木崎裕次 演出) 6月30日(土) 18:30～ 愛知県芸小ホール  
主演：藤井奈緒美、川合もとみ、永野佐織 紙ふうせん公演 (橋詰)

⑦⑧オペラ『森は生きている』(林光作曲・中村敬一 演出) 7月1日(日) 13:00～ びわ湖ホール  
平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 (服部・玉崎)

⑦⑨演劇『さんしょう太夫』(説教節より) 7月11日(水) 18:15～ 四日市市文化会館第2ホール  
作：ふじたあさや 演出：香川良成 音楽：平井澄子 美術：西山三郎  
主演：武井茂、竹下雅臣、小林祥子 前進座公演  
芸術祭優秀賞 斎田喬戯曲賞 児童福祉文化賞 四日市演劇鑑賞会 (服部)

⑧⑩演劇『バーサよりよろしく』 7月15日(日) 13:00～ 三重県文化会館 (服部)

⑧⑪演劇・三谷版『桜の園』(三谷幸喜 作・演出) 7月18日(水) 14:00～ 森の宮ピロティホール  
原作：アントン・チェーホフ 翻案：三谷幸喜 訳：小野理子 音楽・演奏：荻野清子  
美術：松井るみ 照明：服部基 衣装：黒須はな子  
主演：浅丘ルリ子、市川しんぺー、神野美鈴、大和田美帆、藤井隆 制作：パルコ (玉崎)

⑧⑫シリーズトーク『ルチア』(佐藤美枝子) 7月23日(月) 19:00～ 愛知県芸小ホール (玉崎)

⑧⑬オペラ『トスカ』(プッチーニ作曲・佐渡裕 指揮) 7月22日(日) & 7月27日(金) 14:00～ 兵庫  
芸文センター  
演出：ダニエレ・アバド 出演：(22日公演) 並河寿美、福井敬、斉木健司 (27日公演) S.ヴァ  
シレヴァ、T.アランカム、G.グリムズデイ  
平成24年度文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業) (服部・玉崎)

⑧④ミュージカル『ミス・サイゴン』(L.コナー 演出) 7月25日(水) 18:30~ & 7月26日(木)  
13:00~ 愛知県芸大ホール (玉崎紫・磯貝・玉崎)

⑧⑤ミュージカル『ヘンゼルとグレーテル』(森さゆ里 上演台本・演出) 8月2日(木) 14:00~  
名東文化小劇場  
グリム原作 音楽・振付: 木村好江 美術: 大沢佐智子 衣装: 中矢恵子 音響: 水野麻美  
制作: 俳優館 名古屋市文化振興事業団 子供のための巡回劇場 (玉崎)

⑧⑥ヨーロッパ・オペラ・ツアー

7月29日(日)	19:00	『トゥーランドット』	バイエルン州立歌劇場
7月30日(月)	19:00	『椿姫』	バイエルン州立歌劇場
7月31日(火)	17:00	『パラの騎士』	バイエルン州立歌劇場
8月2日(木)	21:00	『アイーダ』	ヴェローナ野外オペラ劇場
8月3日(金)	21:00	『カルメン』	ヴェローナ野外オペラ劇場
8月4日(土)	20:00	『ラ・ボエーム』	ザルツブルグ音楽祭 祝祭大劇場
8月5日(日)	19:00	『ナクソス島のアリアドネ』	ザルツブルグ音楽祭 モーツァルト劇場
8月6日(月)	19:00	『魔笛』	ザルツブルグ音楽祭 フェルゼンライトシュレー

(壺江)

⑧⑦イギリス・シェイクスピア観劇

London

8月13日	The Taming of the Shrew	Shakespeare's Globe
14日	Timon of Athens	Royal National Theatre
16日	Richard III	Shakespeare's Globe
21日	Julius Caesar	Noel Coward Theatre

Stratford-upon-Avon

30日	Comedy of Errors	Royal Shakespeare Theatre
	Twelfth Night	Royal Shakespeare Theatre
31日	Richard III	Swan Theatre
9月1日	Much Ado about Nothing	Courtyard Theatre
	Tempest	Royal Shakespeare Theatre

(酒井)

⑧⑧戸田恵子一人芝居『なにわバタフライ N.V.』(三谷幸喜 作・演出) 8月4日(土) 13:00~  
名鉄ホール

- 美術：堀尾幸男 照明：服部基 衣装：黒須はな子 制作：パルコ (服部)
- ⑧⑨ミュージカル『王様と私』(山田和也 演出) 8月5日(土) 13:30～ 長良川国際会議場  
作曲：R.ロジャース 歌詞・台本：O.ハマースタイン 出演：松平健、紫吹淳 (玉崎)
- ⑨⑩ミュージカル『スリル・ミー』(再演)(栗山民也 演出) 8月8日(水) 15:00～ サンケイホール  
ブリーゼ  
2005年オフブロードウェイ初演 2011年9月韓国経由日本初演  
原作・音楽・脚本：S.ドルギノフ 翻訳・訳詞：松田直行 音楽監督：落合崇史  
振付：田井中智子 美術：伊藤雅子 衣装：前田文子 照明：小笠原純 音響：山本浩一  
主演：新納慎也、田代万里生 制作：テレビ朝日 ホリプロ (韓国版も含め4組の公演) (服部)
- ⑨⑪ミュージカル『エリザベート』(小池修一郎 演出) 8月8日(水) & 8月18日(土) 12:00～ 中日  
劇場  
ウィーン初演 20周年記念公演 脚本・歌詞：ミヒャエル・クンツェ 音楽・編曲：シルヴェスター・  
リーヴァイ 音楽監督：甲斐正人 美術：堀尾幸男 振付：島崎徹 衣装：朝月真次郎  
指揮：西野淳 出演(8月8日)：瀬名じゅん、山口祐一郎、石川禅 制作：東宝  
オリジナル・プロダクション：ウィーン劇場協会 (玉崎・服部)
- ⑨⑫ミュージカル『ウエスト・サイド・ストーリー』 8月10日(金) 13:30～ オリックス劇場  
東急シアター・オープン開場記念公演カンパニーの大阪公演 (玉崎)
- ⑨⑬能『田村』と『鐵輪(かなわ)』 8月11日(土) 名古屋能楽堂 (磯野)
- ⑨⑭ミュージカル『ガンバの大冒険』(劇団四季) 8月11日(木) 昼公演 愛知県芸大ホール  
作曲：いずみたく 作詞：山川啓介、梶賀千鶴子 振付：山田卓 制作：劇団四季 (磯貝)
- ⑨⑮ナポリ人形劇『はちゃめチャプルチネラ』 8月19日(日) 15:00～ 損保ジャパン人形劇場(名古  
屋・栄)  
作・演出・出演：Gianluca Di Matteo (服部)
- ⑨⑯シリーズトーク『ルチア』(岩田達宗 演出) 8月21日(金) 19:00～ 愛知県芸小ホール (塹江)
- ⑨⑰演劇『ここまでがユートピア』(鹿目由紀 作・演出) 8月25日(土) 13:00～ 東文化小劇場  
出演：木下治一郎、松井真人、みちこ、近藤絵理、花村広大 劇団あおきりみかん (服部)

- ⑨⑧ 演劇『リチャード3世』（山崎清介 脚本・演出） 8月26日(日) 14:00～ 愛知県芸小ホール  
小田島雄志翻訳による 衣装：三大寺志保美 舞台監督：井上卓 照明：山口暁 音響：角張正雄  
出演：伊沢磨紀、佐藤誓、山口昌弘  
制作：華のん企画・子供のためのシェイクスピア・カンパニー (塹江)
- ⑨⑨ 演劇『から騒ぎ』（オックスフォード大学演劇協会公演） 8月30日(木) 14:00～ KAAT 横浜神奈川芸術劇場 (服部)
- ⑩⑩ 堺シティ・オペラ『ちゃんちき』（團伊玖磨 作曲） 9月1日(土) 14:00～ 堺市民会館大ホール  
台本：水木洋子 指揮：船曳圭一郎 演出：茂山千三郎 制作：堺シティオペラ一般社団法人  
平成24年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業） (服部)
- ⑩① 能『嵐山』『徨々（しょうじょう）』 9月2日(日) 名古屋能楽堂 (磯野)
- ⑩② オペラ『森は生きている』（こんにやく座公演） 9月7日(金) 19:00～ 俳優座劇場  
オペラシアターこんにやく座 林光追悼公演 原作：サムイル・マルシャーク 湯浅芳子訳  
台本・作曲：林光 演出：大石哲史 ピアノ伴奏：萩京子  
平成24年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業） (服部)
- ⑩③ オペラ『夢遊病の女』（ベッリーニ作曲・藤原歌劇団） 9月8日(土) & 9月9日(日) 15:00～ 新国立劇場オペラハウス  
公演監督：岡山廣幸 指揮：園田隆一郎 演出：岩田達宗 出演：高橋薫子、小山陽二郎、妻屋秀和 (9/8)、光岡暁恵、中井亮一、デニス・ビシュニャ (9/9)  
平成24年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業） (服部・玉崎)
- ⑩④ 能『養老』と『班女（はんにょ）』 9月8日(土) 名古屋能楽堂 (磯野)
- ⑩⑤ ミュージカル『ダディ・ロング・レッグズ』（ジョン・ケアード 演出） 9月10日(月) 14:00～ シアター・クリエ  
原作：J.ウエブスター 脚本：ジョン・ケアード 音楽・編曲・作詞：ポール・ゴードン  
翻訳・訳詞：今井麻緒子 装置・衣装：デイヴィッド・ファーリー 音楽監督：山口琢也  
主演：井上芳雄、坂本真綾 (玉崎)
- ⑩⑥ オペラ『ランメルモールのルチア』（ドニゼッティ作曲、岩田達宗 演出） 9月16日(日)・17日(月) 14:00～ 愛知県芸大ホール

愛知芸術文化センター開館 20 周年記念・愛知県文化振興事業団プロデュース・オペラ  
 指揮：マッシモ・ザネッティ 美術：島次郎 衣装：前田文子 照明：沢田祐二  
 主演：佐藤美枝子、村上敏明、堀内康雄 管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団  
 合唱：AC 合唱団 制作：愛知県文化振興事業団 協力：日本オペラ振興会 芸術文化振興基金  
 (服部・橋詰・塹江)

107 演劇 The Taming of the Shrew (D : Meg Roe) 9 月 17 日(日) 20 : 00 ~ Vancouver, Canada  
 Cast : Lois Anderson & John Murphy 'Bard on the Beach' Shakespeare Festival (May 31-Sept.  
 22) (玉崎)

108 韓国ミュージカル 『Jack the Ripper』(チェコ初演作・韓国語上演) 9 月 21 日(金) 18 : 30 ~ 東  
 京・青山劇場 Musical Art Co., Ltd 他制作 (伊藤)

109 『サンドリヨン・ピオー・リサイタル』 9 月 22 日(土) 16 : 00 ~ 17 : 40 電気文化会館 (玉崎)

110 ミュージカル 『ヘドウィグ & アングリィ・インチ』(大根仁 上演台本・演出) 9 月 22 日(土)  
 17 : 00 ~ Zepp Nagoya  
 ジョン・キャメロン・ミッチェル作・スティーヴン・トラスク作詞作曲  
 主演：森山未来・後藤まりこ 企画・制作：ニッポン放送 (玉崎紫)

111 演劇 『夜叉ヶ池』(宮城聡 演出) 9 月 29 日(日) 16 : 00 ~ SPAC 静岡芸術劇場  
 作：泉鏡花 美術：深沢襟 衣装：竹田徹 音楽：棚川寛子  
 出演：永井健二、布施安寿香、奥野晃士 たきいみき SPAC 静岡芸術劇場 (伊藤)

112 人形浄瑠璃「文楽」 10 月 4 日(木) 14 : 00 ~ & 18 : 30 ~ 10 月 5 日(金) 11 : 00 ~ & 15 : 30 ~  
 名古屋芸術創造センター  
 【昼の部】『桂川連理柵』六角堂の段、帯屋の段、道行臈の桂川  
 【夜の部】『二人禿』『義経千本桜』すしやの段 (塹江・磯貝)

113 シリーズ・トーク「ワーグナーの生涯 天才モーツァルトとワーグナー」 10 月 6 日(土) 13 : 30 ~  
 愛知県芸コンサートホール (塹江)

114 オペラ 『三文オペラ』(クルト・ワイル作曲 栗山正良 演出) 10 月 6 日(土) 14 : 00 ~ &  
 10 月 8 日(月・祝) 14 : 00 ~ びわ湖ホール  
 プレヒト戯曲 園田隆一郎指揮 主演：迎肇聡ほか びわ湖声楽アンサンブル

日本語上演 平成 24 年度優れた劇場・音楽堂からの創造発進事業

(服部・塹江)

- 115 演劇『アリス・イン・ワンダーランド』(劇団テアトロ・マジコ公演) 10月8日(月) 13:30~  
千種文化小劇場

原作:ルイス・キャロル 脚本・演出:浜銀子 美月ノン、浜銀子 制作:テアトロ・マジコ

(玉崎)

- 116 ミュージカル『Let's Go 7 福神』(野村幸廣 作・演出) 10月14日(日) 12:30~ 四日市市文化  
会館

脚本・作詞・作曲:野村幸廣 作曲・編曲:大河内俊則 振付:松井由

制作:劇団集団ローカルスーパースターズ

(服部)

- 117 オペラ『サロメ』(ウィーン国立歌劇場引越公演) 10:16日(火) 16:00~ 東京文化会館 (塹江)

- 118 音楽劇『ファンファーレ』(柴幸男 作・演出) 10月20日(土) 14:00~ 三重県文化会館小ホー  
ル

脚本:柴幸男 音楽:三浦康嗣 振付:白神ももこ 出演:坂本美雨

(服部)

- 119 歌舞伎『吉例顔見世興行(中村勘九郎襲名披露)』 10月21日(日) 16:00~ & 10月24日(水)  
11:00~ 御園座

(磯貝・塹江・磯野)

- 120 オペラ『フィガロの結婚』(ウィーン国立歌劇場引越公演) 10月23日(火) 17:00~ 神奈川県民  
ホール

(塹江)

- 121 オペラ『イル・カンピエッロ』(ヴォルフ=フェッラーリ曲、カルロ・ゴルドーニ原作)

10月28日(日) 14:00~ カレッジオペラハウス

大阪音大カレッジオペラ、指揮:大勝秀也 演出:栗國淳

芸術文化振興基金

(服部)

- 122 ミュージカル『ロミオ&ジュリエット』(フランス招聘版) 10月28日(日) 13:30~ 梅田芸術劇  
場メインホール

(玉崎)

作曲:プレスギルヴィック 台本:D.ライト 歌詞:M.コリー 出演:シリル・ニコライ、ジョ  
イ・エステル

- 123 オペラ『フィガロの結婚』(モーツァルト作曲、古谷誠一 指揮、直井研二 演出、名古屋二期会)



10月27日 & 28日 愛知県芸大ホール

27日出演：奥村晃平、山口雅子、塚本伸彦

28日出演：水谷和樹、大久保幽香、吉田裕樹 芸術文化振興基金 (安藤)

124 狂言『野村万作・萬斎狂言の夕べ』(演目：蚊相撲 & 舟渡婿) 10月31日(水) 18:30～ 日進市民会館

解説：石田幸雄 出演：野村万作、野村萬斎、月崎晴夫、深田博治、竹山裕樹ほか

(玉崎・玉崎紫)

125 演劇『病は気から』(ノゾエ征爾 潤色・演出) 11月3日(土) 16:00～ 静岡芸術劇場 SPAC

モリエール原作 舞台監督：内野彰子 美術：深沢襟 衣装：駒井友美子 音響：西沢理恵子、山崎智美、出演：安部一徳 石井萌水 泉陽二

制作：SPAC ふじのくに芸術祭共催事業・平成24年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 (服部)

126 ミュージカル『ウィズ～オズの魔法使い』(宮本亜門 演出) 11月3日(土) 18:30～ & 11月5日(月) 12:00～ 中日劇場

原作：ライマン・フランク・ボーム 脚本：ウィリアム・F.ブラウン 作詞作曲：チャーリー・スモールズ 翻訳：宮本亜門 訳詞：森雪之丞 音楽監督・編曲：Nao'ymt 美術：増田セバスチャン 装置：原田愛 衣装：岩谷俊和 振付：仲宗根梨乃

主演：増田有華、ISSA、良知真次、エハラマサヒロ、森久美子、小柳ゆき、ジョン・モーニング、陣内孝則 制作：パルコ (磯貝・玉崎)

127 演劇『二人の長い影』(山田太一作・高村真一演出・劇団名芸) 11月4日(日) 14:00～ 天白文化小劇場

劇団名芸創立50周年記念公演第4弾

(磯野)

128 オペラ『アンナ・ボレーナ』(ウィーン国立歌劇場引越公演) 11月4日(日) 15:00～ 東京文化会館

(塹江)

129 MET ライブ・ビューイング・オペラ『愛の妙薬』(ドニゼッティ作曲) 11月7日(水) 10:00～ ミッドランドスクエア

(塹江・磯貝)

130 オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』(マスカーニ作曲) & 『ジャンニ・スキッキ』(ブッチェリ作曲) (ソフィア国立歌劇場公演) 11月8日(木) 18:30～ 愛知県芸大ホール

美術・衣装、出演：G.リュスコヴァ、K.アンドレーエフ）＆「ジャンニ・スキッキ」（V.ゲンチェフ 指揮、P.カルターロフ 演出、R.モノポリ 美術、出演：V.サムソノフ、S.テネヴァ）

（玉崎・塹江）

131 能『橋弁慶』『紅葉狩り』（宝生流） 11月8日(木) 13：00～ 名古屋能楽堂 （磯野）

132 オペラ『メデア』（アリベルト・ライマン 台本 & 作曲・下野竜也 指揮）（東京二期会）

11月9日(金) 14：00～ 日生劇場

日生劇場開場 50 周年記念公演・特別公演 原作：F.グリルパルツァー 演出：飯塚勲生

主演：飯田みち代、小山由美、宮本益光

平成 24 年度文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業） （服部）

133 演劇『ルーマーズ』（N.サイモン作、高橋昌也 演出） 11月9日(金) 13：00～ シアター・ドラマ・シティ（梅田芸術劇場）

さようならテアトル銀座公演 作：ニール・サイモン 訳：黒田絵美子 美術：高橋昌也

衣装：黒須はな子 主演：黒柳徹子、羽場裕一、かとうかず子 （玉崎）

134 オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』（W.A.モーツアルト曲・園田隆一郎 指揮） 11月11日(日)

14：00～ あましんアルカイックホール

演出：松本重考 美術：荒田良 衣装：前岡直子

主演：田村香絵子、安本佳苗 関西二期会（尼崎市） （服部）

135 ミュージカル『客家』（謝珠栄 演出） 11月10日(土) & 11月24日(土) 13：00～ 天王洲銀河劇場 & 梅田芸術劇場 （服部・玉崎）

136 演劇『たとえば野の花のように』（鄭義信作・木崎裕次 演出） 11月17日(土) 14：00～ 千種文化小劇場

主演：杉本葉子、笠原美津代、梅日和、安藤元保 美術：福田由佳 制作：名古屋シアター・アーツ （玉崎）

137 「藤村美穂子コンサート」 11月20日(火) 19：00～ しらかわホール （塹江）

138 演劇『普天間』（坂手洋二 作、藤田ごう 演出、青年劇場公演） 11月21日(水) 18：30～ アートピアホール

美術：石井強司 照明：和田東史子 衣装：宮岡増枝 出演：高安美子、矢野貴大、吉村直主演

(伊藤)

139 演劇『宴会泥棒』(劇団 NLT) 11月21日(水) 18:45~ 四日市市文化会館 四日市演劇鑑賞会  
ジュリオ・スカルニッチ レンジ・タラブージ作 脚色演出:釜紹人 主演:林与一 (服部)

140 演劇『ロミオとジュリエット』(オマール・ポラス 演出) 11月24日(土) & 12月9日(日) 14:00~  
静岡芸術劇場 SPAC  
原作:シェイクスピア 日本語訳:河合祥一郎 フランス語訳:フランソワ=ヴィクトル・ユゴー  
構成・演出:オマール・ポラス 出演:大内米治、貴島豪、武石守正、ルイ・フォルティエ、ピエール  
ル=イヴ・ル・ルアルン、ソフィー・ブレック SPAC 静岡県舞名芸術センター テアトロ・マラ  
ンド共同制作 (服部・伊藤)

141 音楽付きコメディ『病は気から』(M.A.シャルパンティエ作曲、モリエール 台本、寺神戸亮 指揮、  
管弦楽:レ・ボレアード) 11月25日(土) 14:00~ とびあさくらホール  
総監督:寺神戸亮 ステージング:宮城聡 セミ・ステージ形式 歌詞:原語 台詞:日本語上演  
俳優と歌手の出演 平成24年度文化庁地域発信・文化芸術創造発信イニシアチブ (服部)

142 演劇『よく聞く』(鹿目由紀 作・演出) 12月1日(土) 11:00~ 愛知県芸小ホール  
主演:手嶋仁美、松井真人、みちこ 劇団あおきりみかん其の貳拾七 (服部)

143 オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(モーツァルト作曲、沼尻竜典 指揮) 12月2日(日) 14:00~  
びわ湖ホール  
演出:ジョルジュ・デルノン 出演:佐々木典子、小野和歌子、高橋薫子  
平成24年度文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業) (服部・玉崎・塹江)

144 ミュージカル『レイル・ドリーム』(四日市市民ミュージカル) 12月8日(土) 13:00~ 四日市  
市文化会館 (服部)

145 オペラ『ヘンゼルとグレーテル』(フンパーディンク作曲、佐藤正浩 指揮)(愛知県立大学院オペ  
ラ) 12月8日(土) & 12月9日(日) 14:00~ 長久手文化の家 (磯貝・服部・玉崎)

146 MET ライブビューイング・オペラ『テンペスト』(トーマス・アデス作曲・指揮) 12月8日(土)  
10:00~ ミッドランドスクエア・シネマ  
演出:ロベール・ルパーージュ サイモン・キーンリサイド主演 MET 初演(2004年イギリス世界  
初演、2006年アメリカ初演) (服部)

- 147 ミュージカル『アリス・イン・ワンダランド』（鈴木裕美 演出） 12月15日(土) 13:00～ 梅田  
芸術劇場メインホール  
原作：ルイス・キャロル 台本・歌詞：G.ボイド & J.マーフィ 音楽：F.ワイルドホーン  
上演台本・歌詞：鈴木哲也、高橋亜子 音楽監督・指揮：塩田明弘 音楽監督：竹内聡  
美術：二村周作 照明：原田保 音響：山本浩一 効果：青木タクヘイ 殺陣：諸鍛冶祐太  
衣装：S.ヒルファーティ 舞台監督：二瓶剛雄 振付：YUSUKE 他8名  
主演：安蘭けい、濱田めぐみ、田代万理生、石川禅、渡辺美里 ホリプロ制作 (玉崎)
- 148 ミュージカル『とってもゴースト』（音楽座ミュージカル） 12月16日(日) 13:00～ 幸田町民会  
館さくらホール  
平成元年文化庁芸術祭賞受賞作品・第25回紀伊国屋演劇賞個人賞受賞・第28回紀伊国屋演劇賞団  
体賞受賞 (玉崎)
- 149 演劇『星の息子』（坂手洋二 作・演出） 12月16日(日) 14:00～ 愛知県芸小ホール  
美術：じょん万次郎 衣装：大野典子 音響：島猛  
主演：渡辺美佐子、円城寺あや、樋尾麻衣子 制作：燐光群 (服部)
- 150 演劇『Chanson de 越路吹雪・ラストダンス』（山田和也 演出） 12月22日(土) 12:00～ 中日  
劇場  
原作：岩谷時子 脚本：高平哲郎 音楽：江原啓太 美術：松井るみ 照明：高見和義  
音響：山本浩一 衣装：原まさみ 振付：青木美保  
出演：瀬奈じゅん、斉藤由貴、宇野まり絵、柳家花緑、大澄賢也、別所哲也  
企画・制作：東宝、コマ・スタジオム、東宝芸能 (玉崎)
- 151 映画『レ・ミゼラブル』 12月25日(水) 10:00～ & 12月26日(木) & 12月28日(土) MOVIX 三好 &  
伏見ミリオン座  
1985年ロンドン初演舞台の映画化 1987年Broadway開幕 1987年トニー賞作品賞ほか8部門  
受賞作品 舞台の制作者キャメロン・マッキントッシュが映画でも制作者  
(玉崎・玉崎紫・服部・磯野・伊藤・酒井)
- 152 パンク歌舞伎『逆夢』（原智彦 作・演出） 12月22日(土) 14:00～ 12月23日(日) 14:00～  
名古屋能楽堂 (服部・塹江)

・ 2012 年全国上演作品

(1) オペラ (Our Selection)

月	劇場	作品名	演出家	指揮者	キャスト	制作団体	参照番号
1	愛知県芸大ホール	トゥーランドット	ナジェジダ・シュヴェッツ	西本智実	マリア・グレギーナ	ウクライナ国立オペッサ歌劇場	3
2	新国立劇場中ホール	沈黙	宮田慶子	下野竜也	小餅谷哲男、高橋薫子、 経種廉彦、星野淳	新国立劇場	18
	東京文化会館大ホール	ナブッコ	ダニエレ・アバド	アンドレア・パッティストーニ	青山貴、岡田昌子、 清水香澄	二期会	17
	はなみがわ風の丘ホール	リゴレット	岩田達宗	瀧田亮子 (pf.)	光岡暁恵、須藤慎吾、 小山陽二郎	小空間オペラ TRIADE	12
3	愛知県芸コンサートホール	マクベス (演奏会形式)		時任康文	堀内康雄、田口智子、 ジョン・ハオ	愛知県芸術文化振興事業団	30
4	愛知県芸大ホール	セビリヤの理髪師	十川稔	現田茂夫	錦織健、森森季、 池田直樹	錦織健プロデュースオペラ	39
	びわ湖中ホール	ピーター・ブルックの魔笛	ピーター・ブルック	レミ・アタゼイ (pf.)	レイラ・ベンハムザ、 ヴィルジル・フラネ	ブッフ・デュ・ノール劇場	40
5	吹田メイスシアター	アドリアーナ・ルクブルール	井原広樹	ダニエレ・アジマン	泉貴子、福原寿美枝、 片桐直樹、小餅谷哲男	関西二期会	51
	東京文化会館大ホール	メリー・ウィドウ	マルコ・マレッシ	エンリコ・ドヴィコ	アンネット・クルト・ シュライプマイヤーダッシュ	ウィーン・フォルクスオペラ公演	64
6	びわ湖中ホール	森は生きている	中村敬一	寺島陸也	びわ湖声楽アンサンブル	びわ湖ホール	78
7	兵庫芸文センター KOBELCO 大ホール	トスカ	ダニエレ・アバド	佐渡裕	並河寿美、福井敬、 斉木健詞	兵庫芸術文化センター	83
8	愛知県芸大ホール	ルチア	岩田達宗	マッシモ・ザネッティ	佐藤美枝子、村上敏明、 堀内康雄、福原寿美枝	愛知県芸術文化振興事業団	106
9	堺市民会館大ホール	ちゃんちき	茂山千三郎	船曳圭一郎	西尾岳史、片桐直樹、 郷家暁子	堺オペラ	100
	新国立劇場オペラ劇場	夢遊病の女	岩田達宗	園田隆一郎	高橋薫子、光岡暁恵、 小山陽二郎、中井亮一	藤原歌劇団	103
10	びわ湖中ホール	三文オペラ	栗山昌良	園田隆一郎	びわ湖声楽アンサンブル	びわ湖ホール	114
11	日生劇場	メデア	飯塚勸生	下野竜也	飯田みち代、小山由美、 弥勒忠史、宮本益光	二期会	132
	北とぴあさくらホール	病は気から	宮城聡	寺神戸亮	マチルド・エチエンヌ、 鈴木美紀子	北区文化振興財団	141
12	びわ湖大ホール	コジファントゥツテ	ジョルジュ・デルノン	沼尻竜典	佐々木典子、望月哲也、 高橋薫子、堀内康雄	びわ湖ホール	143
	長久手文化の家森のホール	ヘンゼルとグレーテル	飯塚勸生	佐藤正浩	愛知県芸大大学院生	愛知県立芸術大学	145

## (2) ミュージカル (Our Selection)

月	劇場	作品名	歌詞台本作家・作曲家	演出家	振付家 (or, staging)	装置 or 美術	衣装	音楽監督・指揮	主演	制作団体	参照番号
2	愛知県芸大ホール	ラ・カージュ・オ・フォル	作詞・作曲: ジェリー・ハーマン、脚本: ハーベイ・ファイアスティン、原作: ジャン・ボワレ、翻訳: 丹野都弓、訳詞: 岩谷時子・滝弘太郎・青井陽治	山田和也	スコット・サモン(オリジナル)、山本浩一	田中直樹(置)	セオニ・アルドリッチ(オリジナル)・小峰リリー	八幡茂(音・編曲) 塩田明弘(指揮)	鹿賀丈史、市村正親、原田優一、愛原実花、今井清隆、森久美子	東宝・ホリプロ	13
3	中京大学文化市民会館	アトム	手塚治虫原案 脚本: 横内謙介 曲: 甲斐正人	横内謙介	ラッキー池田、彩木エリ	金井勇一郎(美)	樋口藍(衣)	小寺仁(音響)	鈴木裕樹、鈴木潤子、岡村雄三	わらび座	26
3	青山劇場	My One and Only	作詞・曲: G. & I. ガーシュイン/台本: P. ストーン & T.M. メイヤー 翻訳・訳詞: 福田美環子	ビル・バーンズ	ビル・バーンズ (振付補: 岸田有子)	伊藤雅子	小林巨和	清水恵介(音監&指揮)	坂元昌行、大和田美帆、大和悠河、鈴木緑馬	Quaras	34
4	愛知県芸大ホール	ジキル & ハイド	R.L. スティーヴンソン作・翻訳、F. ワイルドホーン音楽・L. プリカッス脚本・作詞 上演台本・詞: 高平哲郎	山田和也	広崎うらん	大田創(美)	小峰リリー	甲斐正人(音監) 塩田明弘(指揮)	石丸幹二、濱田めぐみ、笹本令奈、吉野圭吾	東宝・ホリプロ	42
4	ウインクあいち大ホール	お嬢さんお手上げた	台・歌詞: マキノノゾミ、Coba 曲	マキノノゾミ	南流石	奥村康彦(美)	三大路志保美(衣)	久保祐子(演奏・ピアノ)	沢田研二、朝倉みかん	ココロ・コーポレーション	43
4	愛知県芸大ホール	道化の瞳	台 & 歌詞: 玉野和紀 音楽: NASA 編曲: 荻野清子	玉野和紀	玉野和紀	升平香織(置)	十川ヒロコ(衣)	荻野清子(音監)	屋良朝幸、彩吹真央、小西遼生、保坂知寿、小堺一機、玉野和紀	東宝	46
5	兵庫県芸中ホール	神戸はばたきの坂	作: 高橋知伽江 作曲: 笠松泰洋	謝珠栄	謝珠栄	池田ともゆき(美)	西原梨恵(衣)	塩田明弘(指揮)	坂元健児、彩乃かなみ、土居裕子、剣幸、照井裕隆、戸井勝海、	兵庫県立芸術文化センター (企画・制作)	47
5	名古屋芸創センター	楽園	台・作曲: 西田直木 作曲: 青木佳乃・柴田徹也	西田直木	吉田潔	高橋あや子(美)	桜井久美(衣)	西田直木	吉田要士、中村香織、金子昌代	劇団スイセイ・ミュージカル	50
6	パティオ池鯉鮒かきつばたホール	おもいでばろばろ	原作アニメ・岡本望・刀根夕子 台本・作詞・斉藤雅文 作曲: 甲斐正人	栗山民也	田井中智子	松井るみ(美)	樋口藍(衣)	小寺仁(音響)	三重野葵、碓井涼子、丸山有子	わらび座	67
6	静岡県芸術劇場	マハーバラータ・ナラ王の冒険	台本: 久保田稔美 (インド古典に基づく) 音楽: 棚川寛子	宮城聡	SPAC	木津潤平 (空間デザイン)	高橋佳代	寺内亜矢子 (バンドミストレス)	阿部一徳、赤松直美、泉陽二	SPAC 静岡芸術文化センター	76
7	愛知県芸小ホール	湖の白鳥	台: 鹿目由紀 作曲: ノノヤママナコ	鹿目由紀	山内庸平・佐藤豊彦、鹿目由紀	松井組 木下祐一郎	松井純子	神坂立人(音響)	松井真人、木村仁美、手嶋仁美、	劇団あおきりみかん	68
8	愛知県芸大ホール	ミス・サイゴン	台: A. ブープリル、曲: C.M. シェーンベルグ、歌詞: R. モルトビ、Jr. 訳: 信子アルベリー 訳詞: 岩谷時子 オリジナル・プロダクション: キヤメロン・マッキントッシュ	ローレンス・コナー、D. ヤップ (2012 版演出補)	ボブ・エイヴィアン (オリジナル振付)、ジェフリー・ガット(英国ソア海外ツアー公演振付)、B. オズボーン (2012 版振付補)	A. ヴォー (英国・米 国ツアー公演装置)、T. ドライヴァー (英国巡演新版装置)	A. ネオフィト (初演衣装から)	G. シンブソン (2012 日本版音監)、山口琢也 (音監)、若林裕治 (指揮)	市村正親、笹本令奈、山崎育三郎、岡幸二郎	東宝	84
8	長良川国際会議場	王様と私	原作: マーガレット・ランドン、台: O. ハーシュタイン、曲: R. ロジャーズ、訳: 森岩雄・高田晋子、訳詞: 岩谷時子	山田和也	真島茂樹	土岐研一(置)	宇野善子(衣)	八幡茂(音監)	松平健、紫吹淳、花山佳子	映画演劇文化協会 (音楽・舞台・衣装・企画協力: 東宝 全国巡演)	89
9	オリックス劇場	ウエスト・サイド・ストーリー	シェイクスピア原作 A. ローレンツ 台本 S. ソンドハイム 作詞 曲: L. バーンスタイン	D. セインツ(ツアー演出)、A. ローレンツ (新演出) J. ロビンズ: オリジナル演出	J. ロビンズ、振付再現: J. マックニリー	J. ユーマン(装)	D.C. ウーランド (衣装)	ジョン・オニール (音・指揮)	ロス・リカイツ、イヴィー・オルティス、ミッシェル・アラビナ	The Char-lotte Wilcox Company	92
10	青山劇場	Jack the Ripper	脚本: ワン・ヨンボム [Vaso Patejdi 作曲、Ivan Heina 脚本、Michael Kocourek 演出] 原作のチェコ版に基づく韓国版	ワン・ヨンボム	ソン・ビョングンヒョン			イ・ソンジュン(音監)	アン・ジュウク、ソン・ソング	Musical Art	108
10	三重県文化会館小ホール	ファンファーレ	脚本: 柴幸男 音楽: 三浦康嗣	柴幸男	白神ももこ	青木拓也(美)	藤谷香子	星野大輔・飯泉翔太(音響)	坂本美雨、今井尋也、今村洋一	宮永琢生 (ZuQn-Z)・野村政之 (ドラマトルック)	118
11	梅田芸術劇場メインホール	ロミオ & ジュリエット	台: D. ライト 曲: G. プレスギルヴィック 歌詞: M. コリー	合議制	Carl Portal	Dominique Debourges	Lauren Dejardin	Philippe Parmentier (音響) Bela Drahos (指揮) プダベスト交響楽団	シリル・ニコライ、ジョイ・エステール	Dreamers フランスプロダクション	122
12	天王州銀河劇場	客家	原作: 斎藤栄作 作詞&台本: 謝珠栄 作曲: 玉麻尚一	謝珠栄	謝珠栄	大田創(美)	西原梨恵(衣)	玉麻尚一(音)	水夏希、吉野圭吾、坂元健児、伊礼彼方	TS ミュージカル・ファンデーション	135
12	幸田町民会館さくらホール	とつてもゴースト	脚本: 横山由和、音楽: 八幡茂、ワームホールプロジェクト・音楽座ミュージカル	ワームホールプロジェクト	中川久美、香瑠鼓	キヤマ晃二	コシノジュンコ	高田浩(音楽)	宮崎祥子、高野夕奈、安中淳也、広田勇二	音楽座ミュージカル・Rカンパニー	148

## ・ 2012 年オペラ & ミュージカル公演評

### (1) 2012 年オペラ上演の動向

震災の影響を受けた昨年同様 2012 年も海外からの公演は少なかった。公演を行ったのは東欧のウクライナ国立オデッサ歌劇場、ソフィア国立歌劇場と、バーデン市劇場、ウィーンフォルクスオーパー、ウィーン国立歌劇場であった。オデッサ歌劇場『トゥーランドット』はマリア・グレギーナがタイトルロールをすばらしい声で歌った。ソフィア国立歌劇場の愛知公演は東京などで出演した有名な歌手が歌わず、チケットの値段の割に満足感が得られなかった。本場ウィーンの外来公演はどれも別格であった。その中で、フォルクスオーパーの『メリー・ウィドウ』は歌も演出も華やかで楽しめ、NHK で放映された。

メトロポリタン歌劇場 (MET) のライブビューイングは、2011-2012 シーズンは世界 54 カ国 1700 カ所のスクリーンで上演されるまでに成長し、新しいオペラ鑑賞のかたちとして注目すべき存在となっている。これは、毎シーズン、多彩な 15 のオペラ公演を舞台関係者へのインタビューを入れて収録し、ライブ感覚で 1 週間ずつ放映するものである。歌手の素顔や舞台裏まで見せる映像は、劇場体験とは異なる楽しさを提供する。2012-2013 シーズンではすでに『愛の妙薬』『オテロ』と 2004 年初演のトーマス・アデス作曲・指揮による『テンペスト』が上映された。『テンペスト』では、アリエル役のオードリー・ルーナがよく響く高音とアクロバティックな動きや、美しい舞台美術に感嘆させられた。公的な財政支援を受けているヨーロッパの歌劇場と異なり、MET は、寄付金や公演等の収益で事業展開を行い、オペラ上演の成功モデルを提供している。今後、MET を観ればオペラの新しい企画や歌手の動向がよくわかるようになるかもしれない。

日本の制作団体は、内外の団体から刺激を受け上演の企画に工夫を凝らし、それに関連した動画サイトを作ったり、観客参加型イベントを企画したりして、観客の獲得に積極的に取り組んでいる。しかし、鑑賞者は中高年が多く、マイナーな作品では水準の高い公演でも空席が目立つことがある。集客を意識して安易に演目を選び、人気歌手を多用しすぎればやがて公演の質は落ち、他の歌手の活躍する機会を奪うことになる。関係者たちは、オペラの生き残りをかけて模索しているが、まずは財政基盤の確保と、芸術のことがよくわかり、ある程度の権限を持った芸術監督の存在が必須であろう。

6 月に成立した「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」では、劇場、音楽堂等は「人々の創造力を育み、人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点」と定義され、「活力のある社会を構築するための大きな役割を担っている」。この社会政策的な流れに対応するように、神奈川県芸術劇場は「オペラ！/? ~ ネクスト・ジェネレーションへの試み/から」をテーマとする国際芸術フェスティバルを開催した。これはモノと人との関係や社会の在り方が問い直されている今、オペラ上演の現代的意味を問いかけ、芸術の社会への浸透を探る試みである。具体的には、芸術監督宮本亜門演出の『マダムバタフライ X』で伝統の解体・再構築を行い、一柳慧の日本初演作品で現在を提示し、ウィーン国立歌劇場の『子供のための魔笛』で子供に未来を託した。芸術が社会政策として利用され



ることの是非とともに今後の企画と運営を見守りたい。

創立 60 周年を迎えた東京二期会は、その記念事業として園田隆一郎指揮『ナブッコ』、若手中心の『スペイン時間』&『子供と魔法』、『パルジファル』、下野竜也指揮『メデア』を、文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）を得て上演した。これらはエリート好みのバランスのとれたラインアップと言えるだろう。ライマン作曲の『メデア』に関しては、講演会・レクチャー・プレトークまで企画して日本初演を成功に導いた。公演は歌手陣の歌唱・演技と、指揮者の鮮烈な音楽作り、さらに、2 年前に初演されたばかりの作品に日本の聴衆が触れる機会を作った点で高く評価され、平成 24 年度（第 67 回）文化庁芸術祭賞大賞を受賞した。

新国立劇場で目新しかったのは、レパートリーを“より広く”する試みとして、ドヴォルザーク作曲『ルサルカ』のチェコ語上演と演劇部門の芸術監督、宮田慶子演出による『沈黙』の上演である。『沈黙』は信仰や人間の弱さについての普遍的な問いを観客に投げかけ、深い感動を呼んだ。新国立では日本人作曲家の作品上演は 1 シーズン 1 演目である。オペラが、日本人作曲家によりたくさん創作され歌手の実力が上がっている現在、日本のオペラの発展のためにも音楽文化の活性化のためにも、それらの作品が積極的に上演されることを望む。

イタリアオペラをレパートリーにしている藤原歌劇団は『フィガロの結婚』、『夢遊病』を上演した。演目や演出などに目新しさは見られないが、安心して楽しめ、満足感を得られた。『夢遊病』ではベテランの高橋薫子と若手の光岡暁恵をダブルキャストとすることで、客にはどちらの組の公演も聴いてみたいと思わせた。イタリアで修行してきた園田隆一郎の指揮も良かった。

バロックオペラはヘンデル協会や北とぴあ音楽祭で企画・上演された。海外でバロック音楽を学び演奏してきた演奏家や、日本人のカウンターテナー歌手が増えていることが公演を成功に導いている。今年度日本音楽コンクール声楽の部の 1 位もカウンターテナーであった。繰り返しの多いアリア形式のみならず、近現代作品とは異なるピッチや楽器編成による音楽は、典雅で楽しかった。

各地の公共自治体のホールにおけるオペラ上演のなかで、兵庫芸術文化センター主催のプロデュースオペラは 1 週間分のチケットが売りきれることで評判となった。初心者でも愛好者でも楽しめるようにいわゆるオペラの人気曲を演目を選び、話題の歌手や演出家の起用で客を呼ぶ工夫を凝らしている。『トスカ』では関西で評判のソプラノ歌手並河寿美とテノールの福井敬、演出に二期会『ナブッコ』も手がけたダニエレ・アバドが起用された。アバドは、シンプルな舞台上方に 30 度傾けた鏡を吊して登場人物の動きを上方背後からも見せるなどして観客の視線をうまく誘導して、登場人物の心の動きを手堅く見せた。公演パンフレットには「オペラを楽しむエチケット」も記載され、オペラの初心者教育がさりげなく行われていた。芸術監督佐渡裕が音頭をとって、西宮北口はさながら祭り状態であった。

びわ湖ホールの「オペラへの招待シリーズ」はホール専属の声楽アンサンブルの良さを生かした演目で、すばらしかった。特に 1 月に急逝した林光作曲の『森は生きている』は、感動的な追悼公演となって、子供も大人も楽しめた。9 月上演のプレヒト台本、クルト・ワイル作曲の『三文オペラ』は 18 世紀オペラのパロディであるゲイの『乞食オペラ』を下敷きにした作品である。この作品は台詞



が多いため、アンサンブルメンバーは台詞で苦勞していたようだが、オペラ歌手ばかりで上演されることは珍しい。歌に満足した。フィナーレではキャバレーのショー仕立てで、びわ湖ホールの宣伝の替え歌まで飛びだした。演出界の重鎮である栗山昌良が演出を担当し、声楽アンサンブルを演技が出来るオペラ歌手集団に鍛え上げて公演に臨んだのであった。この公演は平成 25 年度新国立地域招聘公演として上演が決まっている。これらとは対照的な公演が、びわ湖プロデュースオペラ『タンホイザー』と沼尻セレクション『コジ・ファン・トゥッテ』であった。内外の一流の歌手や演出家を招き、他の歌劇場との共同制作であったが、寄せ集め感は否めなかった。しかし、カバーキャストが歌うロビーコンサートの企画は評価できる。カバー歌手の歌を披露する機会となるばかりか、公演のない日でも人を劇場に集め、日常的に芸術ファンを増やすことにつながるからである。

この他に関西では質の高いオペラが継続して上演された。関西二期会『アドリアーナ・ルクブルー』では『沈黙』で高い評判を得た小餅谷哲男が良く歌い、演出にも工夫が凝らされていた。ザ・カレッジ・オペラハウス『イル・カンピエッロ』は、ゴルドーニの描いたヴェネツィアの人間模様が、イタリアで幼少期を過ごした栗国の演出で生き生きと描きだされた。堺オペラ『ちゃんちき』、みつなかオペラ『ランメルモールのルチア』も評判であった。

中部地方においては名古屋音楽大学の教員・卒業生が『フィガロの結婚』を松尾葉子指揮で華やかに上演した。名古屋二期会も『フィガロの結婚』を上演した。愛知県立芸術大学大学院オペラ『ヘンゼルとグレーテル』は、院生による歌もオーケストラも良く、美術学部陶磁専攻生の舞台美術とともに楽しめた。また、全国 12 カ所を回る錦織健プロデュースオペラ『セビリヤの理髪師』が芸文大ホールで千秋楽公演を行った。この企画は 5 作目だが、チケット代が抑えてあり、芸達者の日本人歌手を揃えて楽しめる公演となっていた。

愛知県芸術文化振興事業団の企画による「音の楽園シリーズ」の『オペラと魔女』、『マクベス』（演奏会形式）は、コンサートホールで開催されたが、満足いく内容だった。前者では清水華澄と須藤慎吾が熱唱し、後者では久しぶりに名古屋の舞台に登場した県芸大出身の田口智子がマクベス夫人を歌って印象的だった。実際のオペラの上演を観てみたいという気にさせた。

しかし創立 20 周年記念『ランメルモールのルチア』は期待はずれだった。コロラトゥーラソプラノの佐藤美枝子の美しい声は大ホールに響き渡り流石と思わせたが、高音部が少し不安定だった。主要キャスト 3 人に藤原歌劇団団員のトップ歌手を揃えていたが、全体としては平板で印象が薄かった。演出も舞台装置も昨年の藤原の同公演と酷似していた。演奏レベルは決して低くないが、記念公演の企画としては、あまりにも安直である。

この『ルチア』に出演した伊藤貴之や、藤原歌劇団の笛田博昭、小山陽二郎など名古屋ゆかりの歌手たちは、今や東京に進出して活躍している。また、最近のオペラのツアー公演は、名古屋を飛ばす傾向にある。オペラ上演が可能な大劇場があるにもかかわらず、名古屋のオペラ文化はかなり厳しい状況にある。関東や関西の制作団体に比べて、名古屋の公演が文化庁からの補助金が少ないのも事実である。安直な企画が続けば、補助金はさらに減り、オペラを楽しむ機会がますます奪われるだろう。この悪循環を断ち切り、芸術文化の真の活性化を図るために、芸術監督を事業団に迎え入れることが

強く望まれる。そして、日常的にさまざまな人を引きつける工夫と内容の充実は言うに及ばず、それを可能にする財政の確保と予算配分についてあらためて考える必要がある。

文化庁から多額の支援を受けている公演だけでなく、比較的小さな団体による良質の公演があった。企業メセナや公的補助金に頼らず、お金をかけずにオペラを自分たちで上演してしまおうという動きである。個人が建てた風の丘ホールは、必要最低限の人数のトップレベルの歌手と伴奏者、シンプルな衣装と装置で、ボランティアの助けを借りて「ちょっと気軽にオペラ」シリーズを企画・上演してきた。1月公演の『リゴレット』では、光岡がジルダ役を公の舞台ではじめて演じた。小ホールは、大きな劇場で演じる前に、試演して経験を積む場としても機能する。歌手、コレペティトゥア、演出家から制作側の人びとと、オペラの良さを知り、気軽に楽しみたいと願う観客、さらに芸術支援活動に参加することで豊かな人生を送りたいと願う人びとが公演を後押ししていた。一方、宗次ホールでの「村上・砂川涼子のデュオコンサート」2部では歌手4人とピアノ1台で『ラ・ボエーム』の世界を描きだした。どちらの公演もすばらしい歌唱と演技を身近で鑑賞でき、深い感動が得られた。両劇場の企画と運営に今後も大いに期待したい。オペラは決して時代遅れの芸術ではなく、その関わり方や楽しみ方は多様になってきていると感じた1年であった。(服部 記)

## (2) 2012年ミュージカル上演の動向

2012年のミュージカル来日公演は、10月に渋谷にオープンした東急シアター・オーブ（ミュージカル専門劇場）の柿落し公演『ウエスト・サイド・ストーリー』の後、『カム・フライ・アウェイ』、『ミリオンダラー・カルテット』、『ロミオ & ジュリエット』（フランス招聘公演）、『エリザベート・ガラ・コンサート』（ウィーン版）と水準の高い公演が続き、2011年と比べ盛況であった。日本にミュージカル旋風をもたらした『ウエスト・サイド・ストーリー』は、今回原作者の一人アーサー・ローレンツ新演出（初演復刻版）と銘打ち、スペイン語を喋るシャークス団（プエルトリコ人の若者達）が人種差別を鮮明にし、多民族社会アメリカを描いた作品の普遍性を実感させてくれた。2010年バリ再演版『ロミオとジュリエット』は、プレスギュルヴィックの音楽は魅力的だがテープ録音のオケと派手な照明は、ミュージカル・スペクタクルというジャンル名に相応しく、美貌の恋人達、恋人の両家の赤と青に色分けされた衣装、フランスを感じさせるバレエ風の群舞と視覚的效果が際立っていた。

日本版翻案公演は、ブロードウェイの新作が無くシリアスで暗い欧州系ロック・ミュージカルが多かった2011年の後、2012年は陽気で華やかなブロードウェイ・ミュージカルの初演・再演が目だった。1983年NY初演の『My One and Only』（日本翻案版初演）に続き、『アリス・イン・ワンダランド』（2011年NY初演）が早くも日本初演された。典型的ミュージカル・コメディとガーシュインの名曲が魅力的な『My One and Only』は、さらなる再演を期待したい。オリジナルの洒落た衣装の『アリス・イン・ワンダランド』は、ブロードウェイとは変えたという夢の世界（不思議の国）と自己発見の絡みが説得力なく、曲も今一つであった。『ウィズ』（1975年NY初演）は再演だが、宮本亜門新演出と前評判は高かった。だが色鮮やかなだけの安っぽい舞台、音楽は録音、未熟な歌唱の増田有華など、優れた歌唱の小柳ゆき他2、3の演者以外、落胆させられた。今ブロードウェイでー

番輝く若い女優サットン・フォスターを迎えてのガラ・コンサート（新国立劇場中ホール）は特筆すべきである。再来日を実現して、主演の彼女と日本人キャストで1つの演目を上演してほしい。

再演では名作『ラ・カージュ・オ・フォール』で、市村正親・鹿賀丈史の名演ぶりにミュージカル・コメディの楽しさを堪能した。長年鹿賀の演じた『ジキル & ハイド』が、5年振りに石丸幹二によって演じられた。原作より高潔な人物で、それゆえ苦悩するジキルが石丸に適役で好演だった。見事な歌唱で娼婦ルーシーを演じた濱田めぐみと石丸の二人が、作品に新しい魅力を与えた。『ミス・サイゴン』（再演版）では市村の名演技に再び感嘆した。またヘリコプターを登場させるなど大掛かりな仕掛けが売り物の初演舞台を、映像を多用し装置を簡略化して全国どの劇場でも回れるようにした新演出は賞賛されねばならない。だが愛知では会場がとりわけ大きな愛知県立芸術劇場（大ホール）のため、小型化した舞台は弱点となった。名作再演『王様と私』（岐阜市）は、東宝の過去に培った経験・装置・衣装を利用して小規模装置により低額チケットを実現し、全国の普通の会場での巡演を成功させた。松平健の王様始めキャストは音響の良くない会場のわりに、良く歌っていた。こうした方策で大勢の観客を呼びミュージカルを広めようとした企画を、高く評価したい。

名古屋では公演されず近辺都市でいくつも良質な公演が行われた。ミュージカルでないが、マキノノゾミ作・演出の『ローマの休日』（岐阜市）と『高き彼物』（可児市）、二兎社の『こんばんは、父さん』（長久手市）、そして『こうもり』（岡崎市）[サントリーホールとのタイアップ公演]などが上演された。ただし名古屋市では、市内13の各区文化小劇場で、名古屋の劇団が良質な演劇公演を行っている。2012年も坂手洋二、永井愛、鄭義信などの名作が好演された。ミュージカルでは、名古屋の小劇団で人気のあおきりみかんの『湖の白鳥』（鹿目由紀作演出、県芸小ホール）が期待どおり抜群で、俳優館の『ヘンゼルとグレーテル』（名東・千種・中川文化小劇場、森さゆ里作・演出）が夏休みの子供相手とはとうてい言えない良い公演であった。

最近数年韓流ドラマに続き韓国ミュージカルが人気を誇っているが、その中で『ジャック・ザ・リッパー』（チェコ原作初演・韓国劇団による韓国語での日本初演）は水準の高い舞台であった。だが同じチェコ原作初演の日本版ミュージカル『ハムレット』（井上芳雄主演）はシェイクスピア的すぎる演出のため感心しなかった。韓国経由で日本に来たオフ・ブロードウェイの小品ミュージカル『スリル・ミー』（日本版および韓国語版）再演もあり、韓国オリジナル（『パルレ』）上演に加え、英米など海外ミュージカルを韓国が一早く初演し、チケットの高額な日本に輸出する傾向を鮮明にしている。その傾向と逆に『ダディ・ロング・レッグス』（2009年アメリカ初演）は、ロンドン（2011年11月初演）より早い上演で、日本では好評な小品だったものの、たとえ二人芝居にしてももう少しインパクトある舞台にできるのではと思う。

2012年は、東宝などの大資本による大劇場でのスター・キャストの豪華な公演よりも、日本人作家によるオリジナル・ミュージカルや、ミュージカル制作劇団によるミュージカルを見て、大きな感動をえた。まず、小さなショーを発展させた『道化の瞳』（玉野和紀作・演出）が今後名作となる舞台であった。『神戸 はばたきの坂』は兵庫芸文センター制作のある意味市民ミュージカルと言えるが、謝珠栄に指導された市民出演者の努力と、歌と演技の巧い主演陣が輝いていて、今年最高と言える優

れたミュージカルを見せてくれた。T.S.ミュージカル・ファウンデーション本来の新作『客家』（謝  
珠栄作・演出）は相変わらずの高水準の舞台だったが、『神戸 はばたきの坂』に及ばなかった。今年  
観劇したわらび座の『アトム』、スイセイ・ミュージカルの『楽園』、わらび座の『おもいでぼろぼろ』、  
音楽座ミュージカル『とってもゴースト』など、創作ミュージカル劇団の作品は、いずれも地方で公  
演され繰り返し上演されている名作揃いである。この中でとりわけ音楽座の『とってもゴースト』主  
役の宮崎祥子の素晴らしい歌唱に感嘆した。内容もキャリアウーマンが、異界に行った後真実に目覚  
めるという常套的な筋ながら、生演奏と歌唱の見事さにより観客に訴える舞台となった。そのため幸  
田町民会館という地元の人々で一杯の会場から、「よかったよ」と叫ぶ観客がいて、涙を浮かべた人々  
で一杯という舞台と観客の一体感を味わった。こうした創作ミュージカル劇団の質の高さはもっと知  
られていいと思う。ミュージカル翻案公演は、日本語訳で歌うことに無理がある。日本語作詞の歌で  
歌唱力あるミュージカル劇団公演を聞くと、あらためて歌詞と音楽の融合を再認識させられた。

幸田町は音楽座ミュージカルの助けを得て、1月に町民ミュージカル公演を準備している。富山市  
のオーバードホールの市民ミュージカル『ハロー、ドゥリー』（日本初演）は剣幸の主演で優れた公  
演だった。名古屋市のミュージカル『シンデレラ』（ロジャーズ & ハマーシュタイン の名作）は、  
残念ながら、脚本、主役二人の歌唱、オケも不十分と、失望させられた。しかし市民ミュージカルの  
継続と、一層の努力を期待したい。静岡県芸術劇場では、SPAC メンバー出演による『シンデレラ・  
シンデレラ』（鈴木忠志作・演出）が、お伽話のシンデレラを、21世紀に生きる女性として描き、観  
客に演劇の作り方を見せる新演出で上演された。

2012年6月採択の「劇場法」により、全国の劇場、音楽堂で、国民に文化的芸術を与えるよう劇  
場側も企画・運営に配慮し、文化庁は、劇場、音楽堂をいわば評価して、補助金を配分するというこ  
とが決まり、関係者は総論賛成だが、各論ではさまざまな意見でもめている。実際、今年の観劇演目  
で、どの公演が文化庁の支援を受けているか調べてみると、国内オペラ公演、また地方公共ホールで  
上演の演劇公演に関してはほとんどが文化庁の補助金を受けていると知った。高額な上演経費のオペ  
ラへの補助金は当然としても、実はミュージカルも相当高額な経費を必要とする。豪華な舞台や有名  
キャストの経費を、高額チケットにより採算をとる大手の商業演劇劇場はともかく、劇場のない地方  
で巡演するミュージカル創作劇団は、もっと支援が必要と考える。『神戸 はばたきの坂』は、これま  
に優れた公演を成功させている兵庫芸文の企画ゆえに補助を受け、低額チケットで優れた公演を実現  
させたようだ。優れた演劇やオペラは、芸術として補助金支援が受けやすい。また優れた公立劇場企  
画の良い公演ならミュージカルも支援を受けられるが、劇場を持たず一般劇場巡演の創作ミュージカ  
ルは、支援が少ないのではと思われる。ミュージカルは、オペラより少ないにしても、多分野のキャ  
スト・スタッフを要するので相当な経費がかかる。今後さらに創作ミュージカル劇団への支援を期待  
したい。

（玉崎 記）

## ・ 短評選

観劇した作品についての短評をいくつか紹介する。

番号は「 ・ アート・クリティック 2012 年に報告された観劇演目リスト」の参照番号である。

小空間オペラ『リゴレット』 2月2日(金) 12:00～ はなみがわ風の丘 HALL

千葉市のはなみがわ風のホールまで、『リゴレット』をジルダ役光岡暁恵、リゴレット役須藤慎吾、マントヴァ公爵役小山陽二郎という出演者と「小空間オペラ」という言葉に惹かれて出かけた。光岡は2011年藤原歌劇団の『ルチア』タイトルロールで絶賛を博し、須藤は1月末の愛知芸文コンサートホールで美声を聞かせ、小山は愛知県立芸術大学出身の歌手である。

現地に赴くと驚きの連続であった。建築関係の仕事に従事している主催者は、30歳を過ぎて初めて見たオペラに魅了され、質の高いオペラを上演しようと土地を購入し、自ら設計して85席からなるサロン風のホールを建設した。市民と第一線で活躍する歌手・演出家を巻き込み、2000年の開場以来12年間で述べ公演数は120に上っている。

舞台空間及び客席は2階にあり前3列が指定席である。舞台は高さ15センチ、幅7メートルほどの木の台で、正面奥に衝立が設置され、字幕がそこに投影される。客席にはパイプ椅子が並べられ、下手舞台袖にグランドピアノと照明・字幕投影作業用のブースがある。

オペラ演出家として現在活躍中の岩田達宗がこの小空間を生かして濃密な劇世界を生み出した。演技は舞台上ばかりでなく、舞台より一段下がった客席でも行われた。歌手は衝立の後ろ、階段、客席の後ろ、椅子のあいだを通過して入退場を繰り返した。背後からリゴレットの息使いが聞こえたときには、ぞくぞくしたものである。歌手がピアノと掛け合いながら歌い演技する。豪華な衣装や凝った装置に目を奪われることなく、観客は反響する声と生の声を同時に聞く。歌手にとっては全てをさらけ出す過酷な条件である。緊迫感と一体感を伴った小空間オペラの醍醐味がここにある。

ジルダ役の光岡は、今回初めてジルダを演じたというが、パントマイムも含めて迫真に満ちた演技と歌唱であった。特に高音部はきれいであった。この役は今後彼女のレパートリーに加えられることになるだろう。リゴレット役の須藤は暗い感じがよく出ていたが、父と娘の屈折した愛情関係までは表現しきれていなかった。マッダレーナとチェブラーノ伯爵夫人の2役を演じた向野由美子は、一見地味であるが、どちらの役も深い声ですばらしく知的な歌を聞かせた。男性陣のアンサンブルも美しい。また、ピアニスト瀧田亮子は表現力豊かであった。

オペラの新しい楽しみ方に目を見開かれた思いがした。3時間からなるオペラは主要なアリアとアンサンブルに絞ってあったが、芝居としても充分楽しめた。近年良く聞く「サロンオペラ」も歌手たちとピアニストが組んでサロンで提供するこの種の公演である。観客にとっては、終演後に出演者に声を掛けやすく、オペラの世界が身近に感じられる。他方、出演者は演奏の機会が増えると同時に、感想を直に聞ける。21世紀にオペラが生き続けるためには、特別な人たちの占有を解かなければなら



らない。小さな風の丘ホールがオペラの世界に新風を送り込んでいる。

(服部 記)

オペラ『沈黙』 2月19日(日) 新国立劇場中ホール

小説『沈黙』は徳川幕府が長崎の隠れキリシタンに、小さな木の枠のマリア像の踏み絵を課して棄教を迫った史実に着想を得て、遠藤周作が神の存在と信仰の問題を取り上げた作品である。宣教師ロドリゴは「民の苦しみになぜ神は沈黙しているのか」と、神の存在をどこかで疑いつつ信仰を捨てきれない。しかし、彼が棄教しなければ村人は救われないのである。作曲家の村松禎三（1929 - 2007）はこの小説を13年の歳月をかけて自ら台本を書き、オペラ化した。1993年の初演後数回上演されたが、今回は新国立劇場の演劇部門の芸術監督宮田慶子が演出し、オペラ部門と演劇部門が協力した新制作上演である。

原作を読み終えて、また、新国立ホームページ上で公開されていた演出家と指揮者のレクチャーの様様をチェックして、最終日に鑑賞した。下野はレクチャーで、この作品が音楽的によく練り上げられた完成度の高い作品であることを説明している。例えば、情熱的に布教活動に携わっているときのロドリゴの曲はグレゴリオ聖歌と音型が似ている。恋人の死に直面して狂乱するオハルの歌は無調で始まり、死ぬ、つまり、昇天の場で八長調になり終わる。キリシタンの村人の歌は八短調で、裏切り者キチジローはいくつもの調性で書かれている。このように調性が工夫されて登場人物の心の内を音楽が表している。宮田は下野の力を借りて楽譜を読み込み、演出プランを練ったようだ。

舞台装置は小山の上に傾いた木の十字架が立ったシンプルなものである。その装置が回り舞台の上に載せられることで、素早い場面展開が可能になっている。モダンな舞台装置と照明が権力・信仰・人間の強さ弱さを浮き彫りにする。さほど広くない新国立の中劇場で上演されて、舞台の緊迫感が客席に伝わった。

「神の沈黙は神の不在を意味するのか」という、『沈黙』のテキストがオペラ鑑賞中に鮮明に蘇ってきて、音楽が流れるなかで本を読み直している感覚であった。主な役役はダブルキャストで、2005年に新国立劇場地域招聘公演『沈黙』でもロドリゴ役を演じた関西二期会の小餅谷哲男、モキチ役に経種廉彦、原作にないモキチの許嫁オハル役に高橋薫子の組を鑑賞した。小餅谷は、日本語の発声が明瞭で内容がよく伝わる歌を歌い、踏み絵を前に逡巡し疑い悩む宣教師を好演した。経種は、水磔の場面で「ハライソの寺にまいろう」と高く澄んだ声で歌い、試練を受け入れる信仰心の強さを表わすことに成功していた。一方、高橋の歌には無垢なる祈りが感じられた。秀逸であった。

しかし、一番すばらしいと思ったのは指揮者下野と彼が率いた東京交響楽団の奏でた音楽である。筆者の座った、中劇場の左手前方の席から、端正にタクトを振る下野の横顔がよく見えた。『沈黙』を音楽で表す困難さに立ち向かっている音楽家の真剣な面持ちであった。

小説の最終章は読みにくい擬古文の役人日記の体裁で、棄教した宣教師の静かな余生が語られる。オペラはそこをカットして、ロドリゴがマリア像を踏み、朝の白い光が差し込んでくるところで終わる。幕切れで、宮田はマリア像を胸に抱くロドリゴとその様子を覗き見るキチジローの影を浮かび上がらせた。劇中で神や人を裏切りながらも許しを乞い続けたキチジローの姿はロドリゴの陰画であっ

た。キチジローの登場で始まったオペラがキチジローの影とロドリゴを包み込む白い光に満たされて終わることにより、踏み絵による形だけの棄教と永続する信仰の在り方を暗示した。いささか予定調和的であった。

小説『沈黙』は各章で語りの形式が異なる。その重層的な語りが難しい問いに対する考察を促した。一方劇場においては、語り直された作品を他の観客と共有するところから考察が始まる。終演後観客たちの多くはオペラ『沈黙』について語り合っていた。公演は予定調和で終わったが、オペラは人びとに対話を促し、より深い感動をもたらしたのではなかろうか。(服部 記)

④オペラ「ピーター・ブルックの『魔笛』」 4月8日 15:00～ びわ湖ホール中ホール

ピーター・ブルック演出による舞台を鑑賞するのは、2001年『ハムレットの悲劇』(びわ湖ホール)以来である。『魔笛』は彼の健在ぶりをアピールしていた。

モーツァルトの『魔笛』は上演時間が3時間に及ぶ。ブルックは、それを自由に翻案し約1時間半に縮めている。主要なアリアは残されていたが、序曲や繰り返し部分の多くと3人の童子のパートはカットされていた。テキストの翻案は1974年以来ブルックの制作に参加しているマリー＝エレヌ・エティエンヌが行い、音楽の翻案はフランク・クラウチックが担当した。エティエンヌは「『カットする』というよりは reinvent (新しく創り出す) と行った方がいいかもしれません」と公演パンフレットで説明している。音楽に関しては、『魔笛』の楽譜にないモーツァルトの他の楽曲をつなぎとすることによって、単なるハイライト版『魔笛』となることを避けている。本公演が「ピーター・ブルックの『魔笛』」と題されている所以である。

太さのちがう竹の棒が数カ所にまとめて何本か立てられているだけの舞台装置である。竹は必要に応じて動かされ、鳥打ちの棒・牢獄・門などを表すことになるが、その動きは実に綿密に準備されている。登場人物はみな裸足で、衣装はパパゲーノ、パパゲーナを除いて白と黒のモノトーンである。また、歌手の他にアフリカ系の俳優が2人登場する。歌は原語であるドイツ語で歌われたが、初演の地がフランスであったために台詞はフランス語である。2001年のブルックの『ハムレット』も多言語上演であった。作品の意味やメッセージを伝えることに重点を置き、それにふさわしい形をとったら、無国籍な上演になったということだろう。

一般に『魔笛』といえば夜の女王のアリアや、荒唐無稽の筋立てと神秘思想との繋がりが話題になる。しかし、この『魔笛』は愛のテーマに満ちていた。夜の女王はアリアにおいて声を張り上げることなく悲しみを歌いあげた。彼女は地獄の奈落に落ちずに、現世に留まり続ける。また、パパゲーノとパパゲーナがそれぞれ相手の存在に気づき愛を確かめ合う場面は、二重唱だけでなく身体全体の動きで非常にユーモラスに演出されていた。遊びすぎの感もあるが、パパゲーナの子ども誕生の様子は愉快で楽しい。演出に目新しさを求めるに留まらず、演出家がテキストそのものを書き換えることは、古典演劇一般の上演にも見られる最近の傾向である。

徹底して演劇的な公演であったが、音楽も決して悪くなかった。ピアニストはペースを自在に揺らし、ときに弱音を駆使して、歌と絶妙に掛け合った。出演歌手たちはほとんど無名で、一部を除いて、

平板な声の持ち主であった。しかし音楽は声だけで成り立つものではない。演者の意図が伝わる音楽であった。また、笛を吹く場面はジェスチャーでなされた。目に見えず、耳に聴こえぬその笛は逆説的に不思議な笛の存在を示した。最後にマジックショーのようにどこからか笛が取り出されて『魔笛』は終わった。この作品は、オペラというよりもジグ・シュピール（歌芝居）であるが、上演には、劇場に響き渡る声の競演と豪華な衣装、大がかりな装置が必要という常識が見事に覆されていた。ブルックは細部まで訓練の行き届いた演技と音楽で、常識の対極にある公演を行ったのである。

(服部 記)

④音楽劇『お嬢さんお手あげだ』 4月18日(水) 13:30～ ウィンクあいち大ホール

2012年春夏に名古屋近辺で菊田一夫演劇賞受賞作家マキノノゾミ作・演出の3作品が上演された。その中で、沢田研二主演の音楽劇『お嬢さんお手あげだ』を、ウィンクあいち大ホールで観た。若い人もいるが年配の男性も多く女性中心のミュージカル観客と客層が少し違っていた。マキノノゾミ作・演出だから出かけたが、まわりはかなり沢田研二ファンと見えた。この作品は阿久悠作詞・大野克夫作曲「お嬢さんお手あげだ」という沢田の歌に触発されマキノノゾミが書き下ろしたものである。沢田研二の歌のある「音楽劇」と思ったが、この題名曲を除く全ての歌は、沢田の舞台音楽を手掛けてきた作曲家cobaの曲そしてマキノノゾミ作詞のオリジナルであった。そこでドラマに挿入歌のついた劇というより、歌（&音楽演奏）、ダンスと物語が巧みに融合された舞台となっていた。舞台背後紗幕の高所にチェロ、バンドネオン、パーカッションの3名の奏者がいて、生の音楽が生きていた。とりわけ川波幸恵のバンドネオンが雰囲気盛り上げていた。独創的な振付で評判の南流石振付のダンスもドラマに合ったもので、ドラマを豊かに膨らませていた。

幕開きが「恋に乾杯」という歌で、パリの場面の衣装を着た男性陣が、ワンピース姿の若い朝倉みかんを中央に軽快に歌い踊り、観客を舞台に引きこんだ。欧州のある小国の王女様がパリで行方不明という『ローマの休日』をもじったオープニング。王女様を朝倉みかん、彼女を恋する絵描きが沢田研二であったが、巻き毛のウィッグと絵描き風のスモックの沢田は冴えないおじさんという感じで、とうてい若い恋人役には見えない。だが沢田の声はよく透りハリがあった。初めて本格的ヒロインを演じる朝倉みかん（19歳）は、若く上品な王女様と本編のはつらつとした九州弁の強気の娘「さな子」を好演していた。歌は今一つの朝倉だが、今回マキノノゾミの演出で演劇的には鍛えられたと思われた。

本編の幕が開くと、三河屋（酒屋）の場面が変わる。元気のいい酒屋の若旦那伸郎（野田晋市）と喋りながら店先で酒を飲む裾をはしょった着物姿の落語家師匠（山崎イサオ）、それに付き合うサラリーマン牟田さん（すわ親治）。そこへ向かいの漫画家あらま〔安楽満!〕ゆうじ（沢田研二）を訊ねて若い娘が入ってくる。パチンコ帰りに酒屋に寄ったあらまに、彼女は漫画家志望であらまに弟子入りしたくて家出てきたと語る。弟子を承知しないあらまに、実は娘だと名乗る。25年前にあらまが墮落した恋人小春（九州の造り酒屋の一人娘）の娘井上さな子だというのだ。あらまは娘とは認めても、スランプに陥っている今、弟子はとれないと冷たくつばねる。だが、ついほだされて一晩



泊めることにする。それが一晩だけでなく、滞在が長くなり、あらまが本当の父親となっていくのを見せるのがドラマとなっている。漫画家志望の大学生の下宿で泊まり朝帰りした娘に、「どこまでいったんや?」と聞き、「キスだけ」という娘にそれ以上いけない、もうあの大学生と付き合ってはいいないと大騒ぎし父親丸出しで怒るあらまの場面は、傑作である。

最後に、さな子が実は18歳で、あらまの実の娘ではないと分かり、彼女は九州に帰ることになる。部屋を出る前にさな子が「本当のお父さんならよかったのに」と言い、あらまに駆け寄りキスする場面がすばらしい。漫画が書けず遊んでいたあらまが、前向きな娘との生活で変わり、彼女の願い通り再び漫画を書く約束する。

最後にアンコールで白いスーツとハット姿で「お嬢さんお手あげだ」を歌う沢田研二は、軽やかなステップで、声も伸びよく響く。音楽劇と銘うつだけに、この歌が舞台を盛り上げていた。パリの王女様の外枠のドラマは、さな子の母とあらまの過去を描いたもので、さな子に励まされてあらまが描いた新作漫画の劇化であるとわかる。こうした巧みな構成をもつマキノゾミの優れた脚本と彼の演出のもとで、芸達者な男性陣が歌とダンス、見ごたえのある演技を披露し、舞台装置も簡素ながら舞台空間を十分に活かし、上質な舞台を作っていた。(玉崎 記)

④⑥ミュージカル『道化の瞳』 4月26日(木) 18:30~21:30 愛知県立芸術劇場大ホール

第34回(2008年)菊田一夫演劇賞(脚本・演出・振付)作品『The Tap Guy』(2007)に続き、『まさかのchange?!』(2010)、さらに『100年のI Love You』(2011)と、玉野和紀の創作ミュージカルは高く評価されている。そこで2012年作品『道化の瞳』は期待してでかけた。玉野和紀がタップダンスの妙手とあって、彼の脚本・演出・振付の舞台は必見と思ったからだ。

そして期待にたがわずすばらしい公演であった。まず劇場に入るとチャップリン作曲の映画音楽『街の灯』の演奏がBGMで流れ、雰囲気を作りだしていた。これにより『街の灯』の道化と、プロット上の主役、恋人たちよりも愛された道化のタップする20世紀初期ミュージカルを思いださせた。この『道化の瞳』は、玉野のショウステージ『CLUB SEVEN』シリーズの2005年公演舞台の1部を基にしている。物語の核は『街の灯』と同様、盲目の女性チェリルへの片想いの愛のために究極の自己犠牲を示す道化チャーリーであるが、それが劇中劇になっており、外枠として今回のオリジナル・ストーリーがある。盲目で白い杖をつく女性明子(彩吹真央)の一人息子12歳の健一(屋良朝幸)は白血病で入院しており、母の誕生日のためのプレゼントに病院の人々を登場人物にして絵本『道化の瞳』を書いている。迫りくる死期を知った少年は絵本『道化の瞳』のチャーリーと同様、愛する母に瞳を贈ると書いて死んでいく。健一の深い愛は観客の涙を誘う。一方、患者に対し暖かい心もち、一緒に踊ったり歌ったりするユーモアある人間味豊かな医師(小堺一機)が、病院なのに楽しく明るい場面をつくる。小堺は2幕のチャーリー(玉野和紀)と共に道芸でも楽しませる。コメディアン小堺らしいアドリブも魅力である。しかし彼は院長の息子里見(小西遼生)と病院を牛耳っている副院長五十嵐女医(保坂知寿)にはうけが悪く、この悪役組との対立から様々な笑いとドラマが生まれる。

2幕(劇中劇)では『街の灯』を下敷きに、1931年(映画『街の灯』の公開年)のイギリスを背景

に、健一の書く絵本の人物たちが登場する。主役の唾の道化を玉野（サイレントから）、彼が恋する盲目の娘チェリルを彩吹、上流令嬢の彼女に仕事をもらう靴磨きの少年クーガンを1幕の健一役屋良が演じる。美しいチェリルを愛する道化チャーリーは純愛を言葉にできず、花を捧げるのみ。チャーリーの仲間の芸人たちはダンス（タップ）、ジャグリングや輪投げ、ブロック芸の他、バク転などの身体芸を見せ場に、ロンドンの古風で趣ある家々の装置（升平香織）と共にお伽話的な雰囲気醸し出す。貴族の青年ハリー（魅力的な小西）から求婚されたチェリルが盲目ゆえに断ると皆残念がる。健康な目があれば、彼女の眼が治ると知ったチャーリーは、彼の瞳を盲目の娘に贈るため命を断つ。結末の見える感傷的な流れであるものの、演者の見事な演技に感動させられた。

ミュージカルは、音楽とダンス、劇が一体となって観客の共感と感動を呼ぶものである。単に演劇中に音楽とダンスがあれば良いというわけではなく、「音楽による演劇」（オペラ）の伝統を踏まえ、音楽（歌と演奏）とダンスがそれ自体でドラマをすすめ、登場人物を描くものでなければならない。

その点、玉野和紀のオリジナル・ミュージカルは、外枠の病院の物語と劇中劇の人物が異なるにもかかわらず、歌とダンスにより各々の人物を語り、またドラマを発展させ、物語を深めるという役割を果たしていた。プロットは、主人公の死によってその愛の大きさを伝えるというお涙頂戴の定番なのだが、それでも俳優それぞれが役になりきり、優れて芸達者であることにより、オリジナル・ミュージカルと謳う価値ある舞台であった。

惜しむらくは、ただ一点、公演後でも歌い継がれるような曲が無かったことである。NASAの曲は場面を描き、人物を語ることに十分に優れていて、荻野清子の編曲・演奏により、どれも耳なじみが良かった。だがヒット・ナンバーになるような歌が無かった。恐らく劇中劇の主人公道化が無言の故に、ダンスで心を表現するという仕掛けなので、核になるナンバーは道化の気持ち語るタップ・ダンスなのである。話せない歌わぬ道化という設定のためにやむを得ないのだが、他の演者に1節でも歌わせるような方策がとれなかったものだろうか？

しかし満員の観客は感動で滂沱の涙であったし、歌・ダンス・ドラマとに見事なオリジナル・ミュージカルが日本でできるのだと、大いに感激した。（玉崎 記）

④7ミュージカル『神戸 はばたきの坂』 5月2日(水) 14:00～ 兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール 1幕:14:00～15:10 15分休憩 2幕:15:35～16:35

4月28日からの大型連休中に、兵庫県立芸術文化センター中ホールで公演されたオリジナル・ミュージカル『神戸 はばたきの坂』を観た。期待した謝珠栄の演出・振付のみならず、高橋知伽江の脚本も、笠松泰洋の音楽も、どのキャストも優れた公演であった。また、ごく少人数編成による音楽はコンピューター制御による大音響の音楽より心に残り、はるかに生音の感動を与えた。さらにこの優れたオリジナル・ミュージカルを驚くほどの低価格でプロデュースした兵庫県立芸術文化センターの企画・運営にもあらためて感嘆した。

作品は明治末に始まったブラジル移民政策により、昭和5年の春、日本中から集まってきた人々が、神戸国立移民収容所で過ごすブラジル渡航前1週間のオリエンテーション期間を描いている。この状

況はプログラムに言及される石川達三の『蒼氓』と同じである。しかし、『蒼氓』では、移民する人々の貧困と無知、そしてブラジルの悲惨さを知りながら、移民国策を進め利益をうる監督たちの移民たちへの軽蔑と欺瞞、それでも移民せざるを得ない絶望的な日本農政の無為無策が暴かれる。第1回芥川賞も納得の迫力だが、後味の辛い『蒼氓』と比べ、『神戸 はばたきの坂』は『蒼氓』の重いエピソードを多く使いながらも、希望に満ちた快い感動を与える舞台となっていた。その大きな原因は、『蒼氓』での不快な監督たちとは違い、神戸収容所職員丹羽耕介（坂元健児）の移民たちに対する温かな態度、親身に彼らの悩みに向かいあい、渡航へと導く人間味あふれる人物像によっている。彼が美声で歌い、狂言回しの役割を果たすことにより、暗い状況であっても未来に向かって進んでいこうというメッセージを伝えるミュージカルらしい舞台が成功している。

しかし坂元だけでなく、長く音楽座の看板女優をつとめ四季の『サウンド・オブ・ミュージック』のマリアで大好評だった土居裕子も、結膜炎の娘を残して渡航する東北の農家の嫁スズを、美しい声により共感される人物像に造型した。一人だけ移民でなく、最初から垢ぬけた洋装の戸波サキ役の剣幸は美しいだけでなく、一人息子を日本に置いてブラジルに戻る悲しみを秘めて歌うたった一つの歌「ふるさと」によって観客の涙を誘った。スズの夫で貧しい東北の農民横手昇三（戸井勝海）も好演し、横手の姪ミチヨ（彩乃かなみ）は若く華やかで、丹羽にほのかな恋を抱かせ、山手カトリック教会で唯一のロマンス的場面を作る。スズが南京町で出会う中国人張が、「種が地に落ち、芽を出し、枝をはり根をつける」と歌う「落地生根」は、スズを励まし、移民たち全てを勇気づける主題だが、照井裕隆（音楽座出身）のよく通る声と説得力ある歌唱により短い場面だが、感動を与えた。女性たち3人の「女が男と肩を並べる未来」と歌う歌も感動的であった。沖縄出身の姑平良フジを演じる萬あきは、収容所最後の晩にお国自慢の歌や踊りを披露する場面で、沖縄の踊りで面目躍如であった。

特記すべきは、オーディションで選ばれた兵庫県の若者たちのコロスが重要な役割を果たし、わけでも港ではばたくカメメを歌と踊りで演じた場面は印象的であった。謝の主宰劇団ほどには巧くなくとも、熱演により神戸の港とはばたきの坂による希望を与える移民への励ましを浮かびあがらせた。

ミュージカルの楽しさや軽さとは無縁の深刻な物語にも関わらず、観客を微笑ませ、笑わせる場面も多く、移民同士の触れ合いと人間愛に感動させられ、すばらしい公演であった。中ホールもこの舞台の良さを観客に伝えるのにふさわしかった。（玉崎 記）

#### ⑥⑧ミュージカル『湖の白鳥』 6月2日(土) 14:00～ 愛知県芸術劇場小ホール

宣伝コピー「大きいようで小さい、最高にして最低のヘリクツ喜劇ミュージカル、ここに生まれる!!」に惹かれて、あおきりみかんがはじめて挑むミュージカル『湖の白鳥』を観た。その荒唐無稽な展開に多いに笑った。

作品は、世界的大スターをめざすが売れない演劇青年白鳥（しらとり）礼二が、遊覧船上で現実と空想の交差した騒動を繰り広げる話である。奇想天外な設定ながら、「売れなくても、やりたいことをやる」「演技をすることは素の自分をさらけ出すこと」「年収200万」という台詞に、演劇に携わる青年たちの日常生活と決意が透けて見える。作品は、彼らが原点に戻って、やりたいことを確認し再

出発を決意する一貫した筋を持つ一方で、彼らの演劇観や演劇に対する姿勢や苦悩を、パロディの形で示す構造となっている。

鹿目の故郷である猪苗代湖をもじった粉白湖に浮かぶ白鳥の形の遊覧船が舞台全体に設置され、甲板上で物語が進行する。タイトルはロマンティックなバレエ音楽『白鳥の湖』の名詞の順番を入れ替えた『湖の白鳥』となっているが、もちろん、曲の一部も使われている。俳優の白鳥は、自分が売れていることを夢想して、甲板上で小難しい演劇観を披露している。突然、ふわっとした白い衣装の女が劇世界に闖入して、「主人公なら歌を歌って、ステップ踏んで、それが普通のミュージカルなの」「いきなり歌を歌いだすのはおかしいとかいわないで」などとミュージカルのコンベンションを疑わず、それに則るよう美声で歌う。彼女は、彼が密かに憧れている世俗的成功を約束するミューズである。芸術における理想と現実との落差や、苦悩する若い演劇青年の苦悩が、彼が馬鹿にしつつも密かに憧れる大衆受けのよいミュージカルのコンベンションを用いて茶化されているのである。

鹿目作詞、ノノヤママナ作曲の楽曲は、卑近な話題と演劇に対する理想を盛り込みつつ、アイドルの流行歌、子供向けミュージカルの歌、演歌、卒業式定番ソングなど元歌を連想させる巧みな出来である。振り付けも劇団員が行っている。ダンスや歌のうまい劇団員がいる一方で、そうでない人も混じってのハチャメチャ感が従来の統制のとれたミュージカルに疑問を呈すアンチ・ミュージカルとなっている。一方で、流されずにやりたいことをやろうというメッセージをきちんと伝えている。共感した若い観客も多いのではなかろうか。

登場人物は「白鳥」の他に「百舌沢」「鳥山」「目白」など鳥の名前をもじって名付けられ、名前と人物像の一致及びズレを楽しめる趣向となっている。「白鳥」は、神話、詩、音楽から童話に至るまでさまざまな連想を引きおこす。「礼二」は、「例示」「零時」と同音異義語である。在庫整理のエキスパートでもある白鳥は、原点でやりたいことを整理・確認し、やり抜く決意をする。劇の最後でさまざまな楽器を手に人びとが乗り込む遊覧船は、個性的な団員を擁する劇団あおきりみかんに重なる。

現在人気のあるミュージカルは、公演パンフレットの鹿目由紀による「ごあいさつ」中の「さらりと人気のある子」のようなものだろう。その子を「ミュージカル」に、「私」を「あおきりみかんの演劇」に置き換えてみると、鹿目のめざす演劇とミュージカルの関係がねたみやあこがれとともに読み取れる様に思う。鹿目にとってミュージカルは気になる存在ではあるが、その形式を素直にまねてミュージカルを制作する意志はないだろう。深読みであるかもしれないが、この種の読みを誘う作品であることは間違いない。劇団のさらなる活躍に期待したい。

(服部 記)

103 オペラ『夢遊病の女』 9月9日(日) 14:00～ 新国立劇場オペラハウス

藤原歌劇団『夢遊病の女』9月9日公演を新国立劇場オペラハウスで観た。実は9月8日の高橋薫子と小山陽二郎がAキャストであるので、若手のBキャストを選んだ理由を述べたい。2011年の『ルチア』公演主演で光岡暁恵のベルカント歌唱は賞賛された。また2010年『タンクレディ』のアルジーリオが好評だった中井亮一は、名古屋芸術大学出身で、名古屋でも見事なベルカントのアリアを披露している。そこでBキャストを観劇したが、Aキャストも当然すばらしい歌唱をみせたとのこ

とで、公演内容は両日とも同様であると思われる。

藤原歌劇団の今回の美術・装置は、1991年公演『夢遊病の女』以来使用したものをうい、今回で最後とのことであった。純朴な庶民の心を歌うこの作品に相応しい、雪をかぶったスイス・アルプスが描かれた背景画や牧歌的な美術・装置が維持できないとは残念である。日本の歌劇場は衣装、大道具、小道具、美術装置を収納する場所が小さく（または無く）、繰り返し利用できないとすでに新国立劇場開場時に新国立での講演シンポジウムで聞いたが、これほど雰囲気ある美術が失われるのは惜しい。大きな収納場所が早く建設されなければならない。

『夢遊病の女』は1819年のフランス・ヴォードヴィル作品からのオペラ化である。オペラに数々の台本を提供した流行作家ウジェーヌ・スクリーブは、オペラ・コミック『オリィ伯爵』の台本、フランス・オペラ（とりわけグランド・オペラ）のマイヤベーアとオベールのほぼ全ての台本を書き、その他『愛の妙薬』や『仮面舞踏会』など多くのイタリア・オペラも彼の戯曲に基づいている。また彼の得意としたヴォードヴィル芝居の特質は19世紀のメロドラマに受け継がれている。この『夢遊病の女』も、オペラ座の人気曲や町の流行歌のメロディを使う替え歌が慣習の大衆のヴォードヴィルならではの、夢遊病という観客の目を奪う仕掛けで人気を得た。さらに夢遊病の話題性から、1827年オペラ座のバレエに改作され、その大成功がこのオペラ作品を生み出した。

ドラマはスイスの田舎で村人に愛される孤児アミーナの婚約式から幕が開くが、その晩宿屋の男客の寝室で眠っているアミーナが発見されると、婚約者エルヴィーノが破談を宣告する。しかも彼が怒りのあまり、すぐに別の娘リーザと婚約するので、アミーナは絶望する。短い間に婚約破棄し、別の女と婚約するエルヴィーノが真実の恋人なのかという疑いが萌す。だが18世紀フランスでは、感傷喜劇あるいは涙を出させる喜劇（comédie larmoyante）が流行で、無垢なヒロインが誤解され、観客を泣かせる場面の後、ハッピー・エンドを迎える喜劇が好まれた。そこでこのヴォードヴィルの流れをくむ原作の筋も、当時の観客には定番で納得のいくものであった。

しかしその荒唐無稽な進展にも関わらず、このオペラはベッリーニの美しい旋律と多くのコロラトゥーラに彩られたアリアにより、魅力的なオペラになっている。純粋な愛を歌うアミーナのアリアと、嫉妬に狂いながらも、アミーナを愛しているエルヴィーノの複雑な心理を表わすアリアが、うっとりするほど美しい。そこで、美しくベルカントを歌える歌手が揃えば、大衆のヴォードヴィルの陳腐な物語も、恋人達に観客が共感するオペラとなる。最初の場面、光岡（アミーナ）は登場するや、「何という喜びの日」と軽いソプラノで優美に歌い、アミーナの美しさ、可憐さを観客に知らせた。婚約指輪をアミーナに渡すエルヴィーノ（中井）の「受け取って」は、農民とは思えない優雅なテノレ・リリコで歌われ、彼の感傷性を語り、中井の気品ある高音は、貧しい孤児のアミーナにとって、エルヴィーノがいわば、王子様の役柄だと知らせる。また伴奏する村人達の軽やかな美しい喜びの合唱が印象的である。藤原歌劇団のロッシェニ公演では迫力ある男性合唱が聞きものだが、ここでは女性の多い村人達の優しい混声合唱が牧歌的な雰囲気を高めていた。だが2幕の森の中のエルヴィーノの大アリアでは、「すべては終わった」と、高音で心乱れる激しい感情を歌い、過度の情熱ゆえに怒りも嫉妬も激しいエルヴィーノが明らかにされる。高音の難曲を中井は見事に歌った。一方、婚約破棄さ



れて悲しむアミーナに、美德の娘が悲劇にみまわれる感傷喜劇に馴れた観客は、アミーナに同情する。エルヴィーノがアミーナから婚約指輪を奪い返す場面で、初演ではアミーナ役歌手が泣いて観客を涙にひきこんだという (program 小畑恒夫)。この公演でも十分に泣かせる場面となった。そして最後の場面、水車小屋の屋根を歩ききった光岡は名アリア「花よ」で恋の移ろいを悲しく歌って感動させた。エルヴィーノが再び愛を誓ってくれた後には「人が思いもしないような私の幸福」とコロラトゥーラに彩られた華やかなアリアで、光岡は面目を發揮した。光岡も中井も美しい歌唱を披露し、指揮の園田隆一郎に支えられ、他の歌手達も、合唱も皆がベルカント・オペラの魅力に観客を浸らせ、声の芸術を感じさせる公演となった。

来年は関西で『夢遊病の女』の公演が予定されているが、繊細で軽い声の高音で歌われるベッリーニは体格的にも日本人歌手に相応しいので、さらに多くの『夢遊病の女』や『清教徒』の公演を期待したい。  
(玉崎 記)

#### ⑩ オペラ『ちゃんちき』 9月1日(土) 14:00～ 堺市民会館大ホール

團伊玖磨5作目のオペラ『ちゃんちき』を堺市民会館で初日に観た。演出は狂言師の茂山千三郎。冒頭で狂言方の演じる山の神によって口開がなされ、オペラの世界というより狂言の世界へ誘われた。親狐の「とっさま」は子狐の「ぼう」に厳しい自然の中で生きていく術を教え込む。秘伝の1は「人の禪で相撲を取ること」秘伝の2は「世辞追従」、その実地訓練として親狐は美人に、子はその妹に化ける。親子は獺の夫婦を騙してご馳走にありつくが、冬になり逆にだまされる。子狐は親を残して去っていくが、冬を越せるかどうかはわからない。親狐は降り続く雪の中で深い眠りに落ちていく。

因果応報を説教する民話仕立ての寓話は、現代社会にも通じる問題を孕んでおり、劇中の一連の遣り取りは諧謔に満ちている。最後にしんみりとさせながらも悲劇で終わらない話の展開は、この作品が元々狂言の世界と近い関係にあることを示している。

しかしオペラを狂言仕立てにしたのは、演出家と演者たちの力業である。狐の親子役の歌手たちもそれぞれ良かったが、獺の夫婦を演じたベテランの片桐と橋爪は特にすばらしく、深い声と重心の低い所作で、滑稽感を出し舞台を引き締めていた。歌手たちは能狂言の所作であるすり足で登場し、狐の構えや足遣い、獺の向きの換え方から舞まで、能狂言の型を身につけていた。演出の茂山は、型優先の日本の型文化に関して、「制約された型の中に気持ちを作り込む」と述べ、親子の反発や情愛、恨みや寂寥感などを西洋と反対の方法で描くことを試みた。型から入る感情表現はオペラ歌手の通常の舞台表現とは大きな隔たりがあるだろうが、演技に違和感はなかった。ち密な稽古を積み重ね身に付けたと推測される。茂山は、美人役のメゾ・ソプラノ歌手郷家暁子とこれまでコラボレーションコンサートを多く行っているという。はじめてのオペラ演出ではあるが、オペラの世界を熟知していると思われる。

舞台上で北風や雲の動きは頭に雲形の和テイストの飾り物をつけた可愛らしい子供たちの入退場で表され、カレッジオペラハウス管弦楽団には和楽器奏者が加わっていた。動の中に静が浮かび上がり、賑やかに始まり静謐で終わる舞台となった。茂山の自負するとおり「型破り」なオペラである。

公演の主催者である「堺シティオペラ一般社団法人」は、質の高い文化の創造発展をめざす堺市民、近隣の音楽愛好家、音楽家、事業主の支援を取り付け非営利で活動が続けている。会場は決して立派ではないが、ホワイエには堺銘菓の販売やお茶席もあって華やかで活気に満ちていた。新しくも型破りなオペラを支えているのは、「自由都市堺の進取の気鋭と気概を信念とした」型破りな団体である。チケット代も押さえてあり、地方都市での成功したオペラ上演として見習うところが大いにある。

(服部 記)

125 演劇『病は気から』 11月3日(土) 16:00～ 静岡芸術劇場 SPAC

141 音楽つきコメディ『病は気から』 11月25日(日) 14:00～ 北とびあさくらホール

18回目を迎える、北とびあ音楽祭の今年の演目は、シャルバンティエ作曲、モリエール台本の『病は気から』であった。音楽付きコメディがどのような形態であるのか不明であり、上演に静岡芸術劇場 (SPAC) が協力しているというので、両者の舞台を観た。

北とびあの「音楽付きコメディ」は、3幕の喜劇部分と、プロローグ・幕間劇・劇中即興オペラ・ムーア人の歌と踊り・フィナーレからなる音楽部分で構成されたセミ・ステージ形式で、音楽と芝居が交互に演じられた。音楽部分と喜劇部分は、主筋の上で密接な繋がりが無い。CDで予習したときに、全体の構成がよくわからなかったのも当然かもしれない。

SPAC『病は気から』では、旅の一座が場末の古い劇場を訪れ、そこで喜劇を演じ始める劇中劇の設定になっていた。医者が意味不明なラテン語を使い権威を振りかざす場面や、主人公アルガンが死んだふりをして家族の愛を確かめる場面は、現代にも通じる皮肉な内容で、乾いた笑いを誘った。男性俳優が演じた家政婦の演技や弁護士の操るシュールなフランス語風アクセントの日本語台詞なども軽く楽しめた。しかし、医者になる荒唐無稽な儀式の後、アルガン役の役者が白衣を真っ赤な血に染めて倒れる姿はグロテスクだった。実際モリエールはこの芝居の4回目の公演後に亡くなったという。医者の権威を『病は気から』で揶揄した作家が病に冒されていた事実に基づき、役者が病に倒れる設定になっていたのである。古い劇場の客席を舞台上に載せ、そこで芝居が進行するのは、入れ子式の構造を持った演劇の設定としてふさわしい。しかしそれほどの必然性は感じられなかった。その他SPACで違和感を抱いた箇所は、偽音楽教師が恋人と共に演じる即興オペラやアルガンの弟が用意した気晴らしの「ヒップホップガールズ」の歌と踊りのショウであった。表面的な笑いに留まり、笑いが病を治療するまでには至らないと思われた。

北とびあの喜劇部分は、客席のセットも含めてSPAC公演のミニチュア版である。しかし、プロローグにおいて舞台上の客席は、ルイ(14世)を讃える合唱隊席となりセットのもたらす異化効果は薄れていた。医大受験の予備校の看板や白衣を着た歌手の身振りは、歌詞の内容と当然一致せず、宮城聰のステージングの意図はやや不明であった。医師の権威がからかわれているとわかればそれでよいのだろう。音楽はバロックの祝祭感に溢れていた。喜劇部分は音楽演奏の間に組み込まれ、まさに劇中劇であった。オーケストラの器楽奏者が演技を観て笑ったり、一部参加していたのも印象的だった。アルガンの娘とその恋人がフランスと日本の歌手によって演じられることで、即興オペラが俄然

おもしろくなり、また、フランス語と日本語で台詞の遣り取りがなされていた。ヒップホップショウでは、女性歌手に混じって大柄なアルトの男性歌手がムーア女に扮しており意外性が楽しめた。最後に、医者になる劇の結末と音楽のフィナーレが一体となった。音楽が止み、愉悦に浸ったままアルガンが吐血せずに倒れたとき、白衣を着たマエストロの寺神戸亮が客席に向かって「お医者様はおられませんか？」と語りかけ幕となった。彼は公演パンフレットで『『楽しみ』の部分を楽しむつまた本筋に戻り、最後に渾然一体となる』と述べて、公演で音楽と芝居とどちらがメインとなるか明言を避けている。しかし、北とびあで SPAC の違和感を解消したのは、すばらしいパロックの音楽とその奏者たちであった。東京都北区が企画・運営をしている音楽祭が商店街を巻き込んで続いているのも、演奏レベルの高さとそれを楽しみにしている観客がいるからだ。今回はさらに演劇のファンの心も掴んだようだ。

(服部 記)

133 オペラ『メデア』 11月9日(金) 19:00～ 日生劇場

本公演は日生劇場 50 周年記念公演、読売交響楽団創立 50 周年記念事業、二期会創立 60 周年記念公演と銘打たれ、作曲家アルベルト・ライマンが上演に立ち会った。2010 年に世界初演されたオペラの日本初演である。開演に先立ち作曲家によるプレトークがあり、鑑賞の手引きをしてくれた。

エウリピデス原作において、メデアは子殺しをした怖い女性である。しかしライマンは 18 世紀ドイツのグリルパルツァーの作品を種本として自ら台本を書いた。その理由として作曲家は、彼女が日和見になれない人間として描かれていること、金の羊毛をあるべき場所に戻そうとしていること、作曲可能な音楽になる言葉であったことを挙げた。彼によれば、本来あるべき場所に収まっていない多くのモノが、現在世界で諸問題を引き起こしている。神話世界の再現ではなく現代に通じる話を描くことを、彼は意図したのである。メデアにドラマティック・コロラトゥーラ・ソプラノを当てたのは、その声種が、回りの人やモノに振動を伝え、影響を及ぼしていくからである。また隣保同盟の使者はクレオンより高位の地位にあるのでカウンターテナーとしたなどの、登場人物とその声種の関係が説明された。波動である音楽が言葉に代わって人物の内面を伝えるという彼の創作原理も紹介された。

オーケストラは大編成である。ピットを使わず、弦楽パートは 1 階客席前部に、金管・木管・パーカッションの各パートは舞台上左右両端に配置されていた。この配置であると同じパートでも異なる音を弾いたり、異なるリズムを刻んでいたのが目に見えた。指揮はマニアックなレパートリーの指揮者、下野であった。演出の飯塚勸生は、ダンサーや歌手の配し方、空間の使い方などが巧みで、音楽を見事に視覚化していた。さすが、MET 演出部に属している演出家である。彼の演出した愛知県芸芸大学院オペラ『ヘンゼルとグレーテル』においても、「見せる」ことに成功していたことを指摘しておきたい。

美術のイタロ・グラッシは舞台を高低差のある 2 段構造にし、舞台奥一段高い所に垂直な石柱を建て、コリントス（ギリシャ）の規律ある世界を表した。下部手前の舞台上には水が張られ、その中に大きな丸い盆上の台が置かれていた。これがコルキスの自然世界を表している。出づっぱりのメデ



アは、クレオサに楽器を習う場面以外は、ほとんどここにいた。水は2つの世界を隔てている。音楽の振動が水面を揺らし、その動きが影となって劇場の天井に写ると私たちの居る世界も揺れているようであった。ギリシャと反ギリシャの対立は白と赤の衣装でも表されていた。メデアはコリントスで暮らし始めても赤い服を着続け、ギリシャの音楽を奏でることが出来なかった。それをなじるイヤソン。彼女の抑圧された心象世界は赤い服と黒い仮面を着けたダンサーたちによって表象された。音楽が効果音の様に働き、イメージが重なりあい、メデアの怒りと悲しみ、愛と苦悩が描き出された。

歌手たちはすばらしかった。メデア役の飯田は感情移入した声で熱演し、一方ゴラの小山は、落着いた深い声でコロスとして物語を語った。カウンターテナー弥勒の声は異世界からの使者として劇空間に響き渡った。最終場、黒い衣装に金の羊毛を身に纏ったメデアが、「地上の幸福とは何でしょう。それは影です。」と現世の幸福を求めたイヤソンを永遠の夜の闇に閉じ込めて感動的な幕となった。この作品は音楽的に不協和音に満ちていたが、公演は音楽とヴィジョンが調和しすぎていたように思われた。終わってみればわかりやすいオペラであった。同じく日生劇場で来年上演予定のライマン作曲『リア』では、リアのカオスがどのように表現されるのか興味深いところである。

(服部 記)

<sup>144</sup> オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』 12月2日(日) 14:00～ びわ湖ホール

びわ湖ホールとバーゼル歌劇場共同制作、沼尻竜典オペラセレクションのこの公演を筆者はとても楽しみにしていた。びわ湖ホールは日本人歌手中心でキャストを組み、すばらしい公演を多く提供してきたが、今春3月の『タンホイザー』では、一部の歌手の出来が悪くプロダクション全体の印象まで悪くしていた。続く『森は生きている』『三文オペラ』は声楽アンサンブル中心のオペラで、音楽的に非常に満足する内容であった。今回のキャストのうちフィオルディリー佐々木典子、デスビーナ高橋薫子、フェランド望月哲也、グリエルモ堀内康雄らは、二期会と藤原歌劇団のそれぞれトップの歌手たちである。びわ湖ならではの豪華キャストと期待が膨らんだ。

望月は期待の美声テノールである。しかし今回、子音がイタリア語ではなくドイツ語の歌を歌っているように聞こえることがあった。開幕早々舞台上でなく客席平土間席で、男3人の議論の場面をかなり派手なアクションとともに長く歌ってバランスを崩したのかもしれない。観ている側としては楽しめたが、後半声の飛びが悪くなり、少し前のめりになって歌っていたのが気になった。堀内と佐々木は結婚前の男女にしては落ち着きすぎていて、しかも、現代服のコスチュームでは年齢をごまかすことは出来ない。恋人を取り違えた後、それぞれのカップルは親子の様に見えた。確かに歌は抜群に上手なのだが、少しロマン派のオペラ曲の様に聞こえ、軽やかさに欠けた。アンサンブルも揃っておらずあまり楽しめなかった。オーケストラと歌のズレも随所にあり、非常に気になった。沼尻が何度も指揮棒を大きく振ったほどである。モーツアルトの音楽は、案外合わせるのが難しいと聴くが、一流の演者たちでなぜこのようなことが起こったのだろう。

演出・舞台美術・照明は、ドイツ人のジョルジュ・デルノン。現代的な解釈による演出で、最後の大団団のあと一波乱ありそうな気配で幕が下りた。舞台上には大きなソファとその後ろに掲示板の

様な白いボードが立てられ、そこにパリ、ローマ、ロンドン、東京など世界5都市の時間を表示する時計が掛けられていた。これは、どの時代のどの社会でも起こりうる話と考えての演出意図らしいが、オケのズレを気にしていたら、実際の時差と異なる各都市の時刻表示も気になってしまった。「びわ湖ホール」を替え歌の歌詞に入れた『三文オペラ』の盛り上がったフィナーレを思い出し、「東京」の代わりに「びわ湖」として遊んだ方がよかったのにと思われた。恋人たちが偽の出征をする場面では、飛行機の離陸するリアルな映像が映し出された。『コジ・ファン』の魅力は音楽と同時に、騙し騙される演技のリアリティを楽しむことにある。仮面の代わりに有名人(?)のプロマイド写真を使い、時計や本、ブランド品の袋などのリアルな小道具に頼ることで、皮肉にも騙しが薄っぺらになってしまった。恋人の交換とその後の和解が現実味に欠けると言っているのではない。筆者は、この作品がウソを繕いながら恋愛を楽しんでいる人びとの現実を描いたオペラであり、その世界観を表すのに有効な手段がアンサンブルであると考えている。少々期待はずれの鑑賞に終わったのは、設定に合わないレチタティーヴォを削ったり、2幕初めでいきなりデスピーナに歌わせたりしてまで、辻褄を合わせようとした為ではないだろうか。遊びの多い世界を音楽で描ききれなかったように思われる。

(服部 記)

#### ⑧2012年夏ロンドン (& ストラットフォード・アポン・エイボン) 演劇事情

2012年はイギリスにとって世界から注目を浴びた記念すべき年となった。1952年に女王の座に就いたエリザベス2世が今年在位60年を迎え、6月2日から5日にかけての Central Weekend を中心にさまざまな記念行事が開催された。3日には Thames Diamond Jubilee Pageant と銘打って、千隻もの船が、ハマスミスからグリニッジまで、テムズ河を下り、女王の長期に亘る在位を祝った。女王をはじめとする王室一家の乗った船がナショナル・シアターの前を通りかかると、突如ナショナル・シアターのバルコニーに、現在続演されている War Horse の主人公である人形の馬のジョーイが現れ、馬好きの女王を喜ばせる一幕もあった。7月末から9月のはじめまでは、オリンピックとパラリンピックがロンドンで開催され、世界中の人々の目がロンドンに注がれた。ここのところ、経済的な不振から元気のなかったイギリスに活気が戻ってきた。

シェイクスピアにとっても忘れられぬ年であった。7月27日のオリンピック開会式のメイン・コンセプトである “The Isles of Wonder” は The Tempest 中のキャリバンのせりふ “Be not afraid, the isle is full of noises...” に由来し、プロスペローを彷彿とさせるケネス・ブラナー扮するイザムバード・キングダム・ブルネル (日本人にはあまり馴染みがないが、イギリスでは大変有名な技術者) によって、式典の中でこのせりふが朗読され、会場にいた観客だけでなく、テレビを通してこの式典を見ていた全世界の人々にシェイクスピアの存在を強く印象づけた。オリンピック・パラリンピックに併せて、6月21日から9月9日にかけて、London 2012 Festival が開催された。フェスティバル・ディレクターのルース・マッケンジーの狙いは “If we get the festival right, people will remember 2012 not for amazing sport, but for unforgettable art as well” (フェスティバルの公式ガイドより) 「もしフェスティバルが成功すれば、人々は2012年という年を、素晴らしいスポーツのゆえでは

なく、忘れがたい芸術のゆえに、記憶することになる。」ということだという。ロンドンをはじめイギリス各地で、芸術のあらゆる分野に携わる国内外のアーティストを招いて数多くのパフォーマンスが行われた。用意された無料のチケットは 1000 万枚に上るといふ。演劇分野でも多くの公演が行われたが、その一環として、World Shakespeare Festival 2012 が開催された。このフェスティバルは、London 2012 Festival の始まった 6 月 21 日に先立って、シェイクスピアの誕生日 4 月 23 日から、エディンバラ、バーミンガム、ニューカースル、ブライトン、ストラットフォード・アポン・エイヴォン、ロンドンなどの都市で開催され、世界各国から招かれた劇団がシェイクスピア劇とシェイクスピアに触発されて作られた作品とを上演した。その数は 130 本余りにのぼった。日本からは蜷川カンパニーが招待されて Cymbeline をロンドンで上演した。作品を上演するだけでなく、大英博物館での Shakespeare: Staging the World という展示、シェイクスピア・パースプレイス・トラストでの The Stories of Shakespeare と題するエキジビションや、オンラインによるコンファレンスなど、シェイクスピア理解を深めるための試みも行われた。BBC もロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの Julius Caesar（後述）を放映したり、Richard II, Henry IV Part I & II, Henry V の 4 作品を新たにテレビ用映画として制作、放映して、このフェスティバルに参加した。そうした企画の中で、8 月中旬にロンドンを訪れた筆者は実際に観劇することはできなかったが、4 月 23 日から 6 月 3 日まで、シェイクスピアズ・グローブ座で開催された Globe to Globe（地球を地球座へ）と題するシェイクスピア全作品の上演が話題になったので、少し触れておきたい。

この試み Globe to Globe は、この地球（Globe）上のさまざまな地域で、それぞれの言語によって上演されているシェイクスピア劇をロンドンの地球（Globe）座に集結しようとするものである。シェイクスピアの 37 の作品を 35 カ国の 37 の劇団が、1 作品 2 時間 15 分以内に自国語によって上演した。原則として 1 作品を夜公演と昼公演の 2 公演（3 公演行った劇団が 6 つ）で行い、2 日目の昼公演のあとの夜公演では、別の劇団による別の作品が上演された。この試みを企画したシェイクスピアズ・グローブ座の芸術監督、ドミニク・ドロングールは、過去 400 年以上に亘って全世界を旅し、旅の途上で各地に新しい演劇文化を起こし、各地の土壌に深く入り込んだシェイクスピアの作品を、そのままそれぞれの地域の言語で上演しようとするこの試みを「前例のない野心に満ちた試み」（World Shakespeare Festival 2012 の Festival Guide による）だと言う。世界 204 の地域から多くのアスリートが集ったロンドン・オリンピックに比すべくもないが、オリンピックのこの年に開催されるべき、確かに前例のない野心的な試みであった。戦争で疲弊したアフガニスタン、カブールから参加したロイ・エ・サブズ劇団、2011 年に独立を果たしたばかりの世界で一番若い国家である南スーダン共和国からの劇団、中国国立劇場など、この企画を機にロンドンに初登場した劇団もあった。日本からは京都を本拠に活動している劇団「地点」が参加した。わずか 5 人の役者で Coriolanus を上演してみせた。モスクワでの『桜の園』の上演が評価されて招待されたようだが、シェイクスピア劇は初挑戦だったという。大きな騒ぎになったのは、5 月 28、29 日にイスラエル国立劇場ハビマが The Merchant of Venice を上演した時であった。出演者は全員イスラエル人であった。イスラエル人が同胞シャイロックに託して自分達こそが迫害されてきたのだとの解釈を前面に押し出した。ハビマは

ヨルダン川西岸のパレスチナ入植地でたびたび公演を行い、イスラエルの占領政策に協力しているという理由から、今回のこの企画にハビマが参加することに反対する人々もいた。上演当日には、劇場前で上演反対のデモも行われた。劇場入り口には金属探知機が用意され、物々しい警戒の中、上演は予定通り行われた。オリンピックと違って、演劇の上演に政治色を排除することはできない。グローブ座が現在の国際的な政治状況を一挙に背負い込んで、世界各地におけるシェイクスピア上演の現状を世に問うこととなった。シェイクスピアズ・グローブ座のホームページによると、この6週間に亘る公演で8万5千枚以上のチケットが売れたという。

さて、筆者は、オリンピックの終盤、8月中旬から、パラリンピック開催中の9月初旬にかけて、ロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンを訪れた。出発前に得ていた情報からは、World Shakespeare Festival 2012を除くと、ロンドンの演劇界にあまり活気が感じられないでいた。Official London Theatreという小冊子の8月13日から26日までの上演演目を見ると、DRAMAの項目に15作品、COMEDYに8作品、MUSICALに22作品が掲載されている。このところ20年近くの傾向ではあるが、今年もまたミュージカルが優勢である。とはいっても、そのミュージカルにしても、Billy Elliot、Chicago、Blood Brothers、The Lion King、Mamma Mia!、Les Miserables、The Phantom of the Opera、など長年続演されている作品が多く、あまり新作はない。ミュージカルにも閉塞感が感じられる。DRAMAとCOMEDYの23作品中、シェイクスピアの6作品、そのほか、名優デイヴィッド・スシェイが出演するユージン・オニールのLong Day's Journey into Nightとナショナル・シアターが上演しているバーナード・ショウのThe Doctor's Dilemmaを除くと、観たいと思わされる作品がなかった。結局、今夏、ロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンで観た作品はシェイクスピアのみ9作品ということになった。

ロンドンではシェイクスピアズ・グローブ座でThe Taming of the Shrew (8月13日)とRichard III (8月16日)、ナショナル・シアターでTimon of Athens (8月14日)、ノエル・カワード劇場でロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのJulius Caesar (8月21日)を観た。

シェイクスピアズ・グローブ座へは開場以来ほぼ毎年足を運んでいるが、近年、俳優の演技の質が大変よくなってきていると思う。開場当時は、ナショナル・シアターやロイヤル・シェイクスピア・カンパニーなどと比べると、大分劣っていると思われた。The Taming of the Shrewでは、2001年と2010年にオリヴィエ賞を獲得したサマンサ・スピロを起用して、実に活発で魅力あふれるカテリーナを造形した。この作品を観るたびに感じる最後の場面の反フェミニスト的違和感が本公演では観客の大きな笑いの中で表立ってこなかったのは、この劇場の持つ祝祭性ゆえであったのだろうか。開幕冒頭、クリストファー・スライが酒に酔って観客席の中から登場し舞台上がって寝込んでしまう演出は、もう何年も前にロイヤル・シェイクスピア・カンパニーがジョナサン・プライスのスライに初めて採用した演出に倣ったものであったり、ペトルーキオが、父親の死に言及するたびに、彼の召使いがそばにあるバケツを蹴る(“kick the bucket”は「人が亡くなる」という意味)というしつこい演出があったりしたが、全体的に楽しい作品に仕上がっていた。シェイクスピアズ・グローブ座のもう一つの作品Richard IIIには7年ぶりに、1995年から2005年までこの劇場の監督を務めていたマー

ク・ライランスが登場した。Daily Telegraph 紙はその劇評で、「ニュース速報！ しばらくはオリンピックのことを忘れよう。マーク・ライランスがグローブ座に戻ってきた」と、書き立てた。ライランスの持ち味は、デビュー当時から、コミカルなキャラクターを演じたとき最もよく表れてきたと思う。確かにリチャード3世にもコミカルな側面があるにはある。しかし次から次へと殺人を犯していくこの男の極悪ぶりをライランスは表現できるか。アントニー・シャーが演じたりチャード3世を観た経験のあるものにはライランス演じるリチャード3世のスケールの小さい小悪人ぶりは少し不満を感じさせる。ここには悪巧みはあっても悪そのものがない。この後、9月下旬から、ライランスはガラッと役柄を変え、女装して Twelfth Night のオリヴィアを演じることになっている。彼の持ち味を生かした面白いオリヴィアが誕生するに違いない。チケットはすでに完売とのことである。シェイクスピアズ・グローブ座は隣接の地に Sam Wanamaker Theatre という室内劇場を建設していて、この劇場が完成すると、夏のシーズンだけでなく、一年を通してシェイクスピア劇を楽しむことができるようになる。シェイクスピアズ・グローブ座は、演劇愛好家だけでなく、多くの若い人たちにも、初めてのシェイクスピア劇を観る人々にも、豊かなシェイクスピア体験を与えてくれる場として大成功を収めていると言える。

シェイクスピアの作品の中ではあまり上演されない Timon of Athens をナショナル・シアターで観た。演出のニコラス・ハイトナーは、時代と場所を、古代ギリシャ・アテネから現代のロンドンへと移した。第1幕はナショナル・ギャラリーの一室、その名も“タイモン・ルーム”での宴会で始まる。経済界の巨物といった格好のタイモンが近づいてくる連中をすべて友人と見做して歓待している。この劇を現代の寓話とすべく、ハイトナーは執事のフレイヴィアスをフレイヴィアという名の女性秘書に変えて、いかにもタイモンが大企業の経営者であるかのように見える工夫をしている。破産へと追いやられ、友人と思っていた連中からも見放されて人間不信に陥り、リアの如く人間を呪詛するタイモンを現代に蘇らせることに成功した。そのタイモンをサイモン・ラッセル・ピールが見事に演じていた。

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーはストラットフォード・アポン・エイボンでの演目をロンドンに移し、ノエル・カワード劇場で Julius Caesar を上演した。舞台をアフリカに移し、俳優は全員黒人というこれまでにない演出である。演出はロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの新芸術監督グレゴリー・ドーラン。劇が始まる前から、舞台の上で数人の黒人が楽器を使ってアフリカの音楽を演奏して、いつもの Julius Caesar にはない何かがこれから始まるという期待を観客の中に喚起している。ウガンダやジンバブエでの政争を知っている観客は、ローマではなくアフリカの地で、独裁をめぐる争いが今から舞台上で展開することを予期する。ドーランの狙いもここにあったと思われるが、その狙いは十分に実現された。ただ登場する役者の人数が少なかったために、もっと盛り上がったのもよい筈の群衆シーンに迫力がなかった。

ストラットフォード・アポン・エイボンでは、Comedy of Errors (8月30日)、Twelfth Night (8月30日)、Richard III (8月31日)、Much Ado about Nothing (9月1日)、Tempest (9月1日)の5作品を観た。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのシェイクスピア上演には感心することが



多いが、今年もさまざまな工夫が見られた。Comedy of Errors と Twelfth Night と Tempest は “ Shipwreck Trilogy ” と銘打って上演された。言われてみれば、確かにこの 3 作品には船の難破が深く関わっている。ロイヤル・シェイクスピア・シアターの舞台に下に大きな水槽が用意され、舞台の左前方が一部はがされて、水面が顔を覗かせ、海に見立てられている。この水の中から、難破して兄セバスチャンと生き別れになったヴァイオラが全身ずぶ濡れになって舞台に登場する。蜷川の影響を受けたのではないと思われる演出である。Comedy of Errors と Tempest では水の中から役者が登場するシーンはないが、それでも、舞台の一部に水面があることで、これらの作品の背後に大海原があることが実感される。Twelfth Night と Tempest では、アソシエイト・ディレクターのデイヴィッド・ファーの演出をはじめ、舞台装置も照明も音響も音楽もそれぞれ同じ責任者が一つのチームを組んで、上演にあたったので、両作品の雰囲気がよく似たものになっていた。マルヴォリオとプロスペローを演じたジョナサン・スリンガーがそれぞれの人物を見事に演じ分けていた。Comedy of Errors はパレスチナ出身のアミル・ニザ・ズアビが演出したが、この劇の双子の主人公たちの父親、シラキューズの商人イージーオンがエフェソス領内で捕えられて受ける拷問のような仕打ちや、妹ルーシアーナに対するエイドリアーナの過剰なほどのいたぶりに、イスラエルとの確執をどこかで出そうとする演出の意図が垣間見られた。二組の双子による「間違い」続きの喜劇はいつみても面白いが、ただ、「瓜二つ」のはずの二組の兄弟の容姿がこの上演のようにあまりにも違っては、観客の作品への同化が妨げられてしまう。

5 つの作品の中で最も興味深かったのはコートヤード・シアターで上演された Much Ado about Nothing であった。演出はインド出身のイクバル・カーン。俳優は全員インド系、舞台も衣装も音楽もすべてインド。すべてをインドに移しての、ただし、せりふだけは英語の Much Ado about Nothing である。ところどころで練習不足ではないかと思わせる場面や、ベネディックとベアトリスがやや年をとりすぎているなどの欠点はあるものの、異文化の中でシェイクスピアを生かそうとするとこうなるといふ見本のような上演で、大いに喜劇の醍醐味を楽しんだ。

20 世紀末の 10 年ぐらいの間、北アイルランド問題を抱えていたイギリスには、この問題を背景にした劇作品が、フランク・マクギネス、アン・デヴリン、セバスチャン・バリーといった作家たちによって数多く産み落とされた。アイルランド文化にも目が注がれて、ブライアン・フリーエル、コナー・マックファーソン、ピリー・ローチー、マーティン・マックドナーといった劇作家たちが輩出した。20 世紀も 10 数年経った今、このような社会問題が解消して、社会を映す鏡としての演劇がやや停滞しているように見える。その中にあって、シェイクスピアだけが、オリンピックの開催年ということもあって、国際的な視野から見直され、国際色豊かな演出によって、イギリスの地で、新たなそしてゆたかな展開を見せてくれた。

(酒井正志 記)